明治三十年七月廿五日

女學雜誌

第四百四十六號

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百四十六號目次

◎社　說

女風一變の機勢

◎女　學

兒童研究◎男女の氣質(上)◎大奥の朝夕◎台灣新設女學校の狀況◎白知敎育の語に對する評

◎評　論

西鄕南洲と勝海舟(下)　落花淡人

◎隨　感

祇王祇女佛のさとり

◎敎　育

上杉鷹山公の敎育

薩摩隼人の敎育法◎帝國大學の組織◎京都大學の開設◎外國語の直用◎台灣人の敎育修養◎小學敎員の補充

◎雜　錄

海舟先生詠草　鷗　村

御身代り　棠琴女史

今樣夫婦氣質(上)　鴨村耕夫

氷の話(其二)

◎時　文

露國形勢總覽◎新小說第二年第一卷◎片輪車◎新著月刊第四

◎片々◎時報

社　告

●本誌は每月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

●十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學敎界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

●單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらは其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金	壹册　價金拾錢 一年前金　金貳圓　(無郵税)
廣告料	一行　一回(廿七字詰)前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

第四百四十五號目次

◎口　繪

米國ブリンモア女子大學の景

◎社　說

外國人設立の女學校◎女學生の勉學心◎米國女子大學留學に望みある者

◎家　庭

上流今日の家庭◎儉約を口にすべからず◎同伴者ありとの心地◎盜賊の防ぎ方

◎講　義

氷の話　鴨村耕史

◎文　藝

小學生徒裁縫敎授法新案(小出新三郞氏發明)

案山子酒舍社點取會詠　池袋清風大人評點

評釋夏の雨

◎問　答

財產を安全にする事の問答

◎史　傳

齊彬公と西鄕南洲　如雲散史

◎隨　感

懷疑を飾るものあり◎某子の墓に題す◎眞面目の衝突◎誤解は人の事のみに非ず◎うるさし、うるさし◎嫣翁と若翁◎名醫は神に視る

◎雜　錄

あはれ老媼　有美記

悲歎(花影子)◎京都婦人の迷信◎森有禮の婚姻證書

◎時　文

西鄕南洲◎英文靑山叢書◎威海衞大海戰記◎大策士◎兩美人◎新小說第二年第七卷

◎片々　時報

侯爵鍋島直大作歌
山勢松韻作曲

●都の春　全壹册　實價金五拾錢

本歌ハ鍋島侯畢生ノ傑作ヲ山勢松韻氏ガ鍛錬ノ健腕ヲ以テ箏曲ニ將タ西洋樂譜ニ殘ル隅ナク障リナク都ノ春ノ長閑サヲ描出シ更ニ某專門家ノ校閲ヲ經タルモノニシテ其表裝ノ艶麗雅美一見人ヲシテ恍惚卷ヲ釋カシメズ用紙亦上等ニシテ世間嘗テ見ルヲ得ザル高尙ノ最好唱歌集ナリ

●東京統計協會特別會員伊東祐穀君編纂

●露國形勢總覽　正價金五拾錢　郵便稅金四錢

洋裝クロース製金字入●紙數百八十頁

本書ハ帝室、政體、面積及人口、宗教、教育、財政、國防(國境、陸軍、海軍)產業、商業、外交其他ニ分チ露國萬般ノ形象ノ網羅セルモノニシテ職業ノ何タルヲ問ハズ苟モ有志者ニ在テハ一日モ缺グベカラサルハ茲ニ喋々スルヲ要セズ御入用ノ諸君ハ本部ヘ御申込アレ●代價ハ本部主幹鍋島篤宛東京銀座郵便取扱所ヘ御振込ヲ乞フ但シ郵券代用ハ貳錢又ハ五厘切手ニテ一割增

發行所　東京市京橋區山城町六番地　東京統計協會出版部

賣捌所　●丸善●博文館●目黑●八尾●林●大倉●文海堂●東海堂●有隣堂

共益商社編

●常磐　全壹册　定價金貳拾錢

舊八千代獅子

本書ハ舊八千代獅子ヲ西洋樂譜ニ寫シタルモノニメ琴三味線尺八ノ秘曲ヲ其儘記譜シ歌詞ノ俗ナルヲ常磐ト改作シ三曲伴奏ニ供シタルモノナリ

發賣所　東京市京橋區竹川町十三番地　共益商社書店

日本の家庭

毎月一回(十五日)發行●一冊價金六錢●半ヶ年分(六冊)代金三拾六錢●一ヶ年分(十二冊)代金七拾錢●總て郵稅なし●爲替振込飯田町局

口繪 見童果實を採る圖(雅方) 挿繪 大小十餘 社說 まづ日本の神を崇め敬ふべし
史傳 グレース、ダーリング譚(渡邊生) 小說 淺羽の露(植木かしは)○淚の影(金子笹下庵) 教
育 處世教草(鶴峯翁)○庭訓小言(古毛利)○師を貴ふべきと(星川清成) 家事 菓物の功能(天心生)○
家什を購求するにつきて(かへで女)妊娠及產の
と(松雪女史)○烏賊醤油の製法(浪華梅太郎) 雜錄 鹽原の夏
(雲水)○明倫和歌集抄講義(經營生)○空ゆく雲(露骨)○愛ら
しき手紙、○其他雜報○和歌○俳句○問答等例より一層にき
はし○殊に本號には役書募集の廣告を載せたり、

發行所　東京麹町區富士見町六丁目七番地　日本の家庭社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

進步黨々報

第六號(七月十五日發行)◎每月二回(一日、十五日)◎一冊七錢○六冊(三ヶ月分)四十錢○十二冊(六ヶ月分)七十八錢廿四冊(一ヶ年分)壹圓五十錢不要郵稅

(論說)國家最大之憂(柴四朗)財政整理に就て謂ふ(森本確也)(政務資料)豫算に關する資料(松方內閣伊藤內閣財政計畫比較表○明治三十一年度豫算に對する兩計畫比較表○明治二十九年度歲入歲出現計○重要歲入の增加概計)(寄書)外人の來住(山田三良)軍艦派遣は其當を得たり(中井喜太郎)(評論)今の世界◎外六件◎新著批評(雜錄)始は惡鬼後は皇帝◎北米合衆國の發達(續)◎俳句三首◎平素の學何の益かある(外報)米布合併問題の後報 合併條約の全文○元老院の光景と形勢○米國政府の答覆○各國の意向 ◎木浦及鎭南浦の開港◎外七件(經濟事情)明治三十一年度豫算◎米國關稅案の討議了る◎物價騰貴の趨勢◎外五件(黨報)我黨の近情◎福島遊說の景況及結果◎千葉演說會の詳報及同志大會の決議◎黨員の去來◎黨員の入脫(時事)政界の近情◎布哇の外國人上陸條例 時話一節◎讀米風歐雲日記(中島亮平)◎郡事日記

發行所 東京麴町區內幸町一丁目三番地 進步黨々報局

再版

敬若松賤子譯

小公子

正價 金三十五錢 郵稅 金八錢

發兌元 博文館 ○大賣捌 女學雜誌社

社會雜誌

七月十五日刊行 第一卷第四號 定價一部十錢郵稅五厘

要目

孰か臺灣の爲に能く伴食總督たる乎
都邑と租稅
自殺的日本の工業
西鄉南洲と勝伯
工場及職工に關する通弊一斑
東京市中乞食の巢窟、親分及び持場
東京市養育院概況
一睨半語

社說
ガルスト
高野房太郎
落花淡人

政治家の覺悟●役人根性と云ふ者あり●聲ある所に改革なし●責任と政綱●伊藤侯免る可からず●幕府の勢力●商機●眞宗の改革●文部省の根本的改革●高等教育會議●東北、(以上時評)
商黨……即ち第二の政黨
勞働問題に關する最近の時論(十數種の時論を列擧し來りて詳細に評論す、八頁餘に涉る)
昨今の同盟罷工(昨月來、十一種の同盟罷工の成來を詳敍す)
彙報欄如例

次號豫告

雜誌社界の內幕(數十頁に互る上下二篇)

勞働社會の形勢●社會主義の經濟制度に及ぼす結果●日本流行地起原論●東京府下の公娼●社會觀察の種目(農家、田舍、村落、都市等を研究する手引なり)●外に社會學、社會問題の論議五六篇あり、紙面大に刷新す。

發賣所 麴町區下六番町六番地 社會雜誌社

●賣捌所は東京堂、文海堂、上田屋支店、東海堂、北隆館、盛春堂、田中書店、有斐閣其他。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治三十年七月二十五日發兌

第四百四拾六號

社説

女風一變の機勢

仔細に觀慨すれば、人情の本色は千古東西相違ふとなし。もし其の粋を搾りて其の流に染むれば、人事の勢趣も亦た大率ね推考するとを得べし。

但だ其の外形の隨時に變ずるを見て、人多くは事の新樣に慣れず、驚歎して其の可否を論評するに忙がはし。然れども、もし外形の下に吟味して其の精神を考ふれば、一水の万雨となり、一雨の各樣の流となる所以を知識して、忽ち了悟し、形式の隨時に變化するをもて、必ずしも奇怪の事とはなすまじ。

試みに世々の文書を閲するに、血性の筆を握りたらんほどの文士にして、時世の澆季を歎ぜざりしものは極めて稀なり。五百年前の人も、三百年前の人も、一百年前の人も皆な同樣に歎き、現代の人も亦た同樣に歎き、何れも世の澆季に落膽して、末世の成行に悲憂せざるはなし。茲に一度び冷靜に思慮せよ、世路年々斯の如く末に近づかば、將來の方向は如何か成るべきと。

吾人惟ふに、古來澆季を歎ずるの憂ひは、大抵、人、風俗變遷の異樣に驚ろき、未曾有の新式を怪しみて其の殺風景に嫌悪せし所以に歸源するを多しとなす。正に是れ精神時に隨ひて適宜の形躰を採用し、能く世と推し遷りて、包圍の時態に同應する活世界の進化を忘れしもの丶立論なる耳。

左れば、歴史ありて以來の日本婦人の狀態を念ふに、其の變轉遷移幾回なりしぞ。丈夫に劣らで熊狼を射殺すとを業とせし折もあり、階上階下、月にあくがれ花に怨みて、歌に浮身をやつすとを務とせし折もあり、馬に跨がり矛とりて花々しき戰するを常とせし折もあり、深窓閨中に身をかくして人に見らる丶を道ならぬとせし折もあり、文字なきを徳とせし

折もあり、子なきを罪とせし折もあり、近代十年のうつり變りに徴するも、既に其の幾歩の遷轉を現ぜしかを記憶する人はあらん。

翻つて維新以后女學の大勢の推移を想ふに、明治六七年を第一期とし、同十六七年を第二期とし、同二十六七年を第三期とす。三期ともに開進に向つて轉じ、一段一段の變遷を了す。明治六七年は明六社ありて男女同權論起り、延いて、開拓使の女學校、竹橋内の女學校、同人社女學校、女子師範學校等を創立せしめたるの氣運なり。明治十六七年は、伊藤井上榮華に滿ちたる滿潮にして、婦人慈善會起り、男女混淆の種々の舞踏會起り、別に女學新誌（后に女學雜誌）明治女學校、女子職業學校等を創立せしめたるの時代なり。後亦た十年、明治二十六七年に及んで女學一新の機既に熟せる時、偶ま戰役あり、爲に一二年の期を遲くせしと雖も、是が爲に一層の潜勢を決し、顯著なる振動を斯學界の全面に施し、女學亦た一轉せり。

凡そ人事の變遷は、七年に初まりて十年に熟す。眞に不可思議の調和ありて妙に其算數を合はす。靈活複雜なる世態の實相も亦た因果の律に免れざれば也。此をもて吾人不肖の淺見を恐れず、曩に、

女子敎育大勢一轉の機明治廿七年五月廿六日本誌第三百八十一號
女學界今後の大勢同廿七年十一月廿五日本誌第四百四號
高等女學校全盛の時代（來らんとす）同廿八年九月廿五日本誌第四百十四號
日本女學の大勢同廿九年十月廿五日本誌第四百二十八號

等の論說をもて機勢推移の大躰を其時々に揣摩せしに、幸にして皆な憶測に外れず、果して、今は左の二個の事實を顯現するに至りたり、云く、

一　高等女學校は既に全盛の域に入りたり
二　女子の高等敎育は輿論に贊同せられたり

惟ふに、明治二十六七年を機端とすべき現在の十年一期は、明治三十六七年をもて終る。指を屈ふれば、今尙ほ六七年をあます。此の間や、高等女學校は彌よ隆盛となり、全國到る處の大市町には必らずや其一もしくは其代用を設置するに至らんこと必せり。而して、女子高等敎育の機運も亦た次第に熟し、此等高等女學校の隆盛（即ち普通女學の隆盛）を地盤として、將に來らんとする次の十年期に於て大いに煥發する

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

なるべし。

但だ見よ、十年一期の初半は機先にして、其後半は機熟してまさに次期の機先を待つの時なり。此をもて、其の初半に於て大に勃興せし機運が、後半に於て反動を惹起し、一時の衰微を示すとなきにあらず。惟ふに、高等女學校に對する非難の大に起るは、其の一度び大に隆盛となりたるの後か。而して、其の機は必らずや今后二三年の間にして起らん。

然りと雖も、茲に一と度び隆盛となりたる高等女學校全盛の爲に、所云る女風一變の機勢既に經過せるとを認めずんばある可らず。今や、隆んなる高等女學校に於ては、一校七八百人の女生を教授しつゝあり。昔し深窓に隱れて人を見るとを恥ぢつる女生反つて一堂に集會し、一大隊以上の人數を組て日々學業に餘念なしと云ふ。女風の一變は既に其の根柢を据ゑたり。

夫れ、女子の高等女學校は、男子の中學校に匹敵せり。男子の中學教育の隆盛も亦た絶頂に達せり。此より男女其の中學教育をもて中等社會の普通教育とし、其の資格の有無をもて紳士貴婦人の資格の一となすべき機勢は到來せり。見よ、高等女學校卒業の一ヶ條は、今后に於ける中等社會以上の女子の婚格に一要件として算入せらるべし。

夫れ、十六七歳の乙女子は、疇昔にありては、既に婚期央するの時と見做されたりき。然るに、今の高等女學校に通學する女生を見れば、年齒十七にして一心讀書に耽り、裝貌宛ら苦學の男生に似つかはしきものあり。而も彼等が三々五々市中街上を横行して、毫も恥態なきの狀を見れば、たとひ深窓にひそかに此の光景を看て、一時は喫驚すらん女性はありとも、亦久しからずして其の趣きを緩ぶべし。况んや、此に見聞し、之に寛容するの父兄昆弟及び一般の男子に於てをや。其の要むる所の次第に變じ、其の好む所も亦漸くにして化せん。たとひ將來多少の反動はありとも、女風一變の機勢は、此の高等女學校の全盛によりて既に决了したるとを知らざる可らず。之れ女學界の時流を識得するものに於て、決して看過す可らざるの事實なりとす。

松風に睡を覺し朗月を友とし究め來り究め去るより外なし

明慧上人

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學

兒童研究

近年海外に兒童研究の事隆んに行はれ、敎育者間の大問題となれり。我國にも、四五年前より其の消息を通ずるものあり、遂に兒童研究會なるもの丶設立せらるゝに至りしことなどは、時々の女學雜誌によりて讀者の既に諒知せらるゝ所なるべし。

近頃に至つては、我國に於ける斯道の研究やうやく緻密に且つ益々隆盛に趨くもの丶如し。所々の敎育會及び敎育雜誌に此の論題を見聞するとの多きは其の例證たるべし。就中、「敎育壇」の第四、五、六の三號に連載せられたる、高島平三郎氏の「小兒研究」の一文章の如きは、近時稀に見るの精細と熱情とに溢る。兒童研究の爲に最も珍重すべきのみならず、凡そ敎育全般の事業の爲に甚だ愛讀すべきものとす。

高島氏の小兒研究を論ずるや、他の幾多の文士の如く空しく疾呼大言するにあらず。一々實際の經驗に徵し、多くは自己か現に施行しつゝある方法を敎告せり。生後六百十七日（一年八ヶ月）の男子につき、其の出產后二時間より初めたる試驗を間斷なく繼續せられたる如きは、其の非凡の熱心を示すに足る。左に例證の二三を擧ぐれば、

生後二時間　手掌を以て面上を掩ひしに眼瞼を開かんとして僅に眼球を現せり。
生後十九日　今朝入浴の際偶然手を口にて吸へり。
同四十七日　要求的發表の時は、アー、アーと呼ぶ。
同五十五日　稍や母を認識するに至れり。
同百五十日　母の聲音を記憶せり。
四百卅七日　始めて數步步む。
五百五十二日　花咲爺の話をせしに熱心に聽聞せり。
六百五日　自から蒲團の上に坐し傍に玩具を排列せしが父を見て蒲團の一隅方五寸許の地を指し、トウチヤン、コ、、エンコツテと云へり。

大抵右の類なり。而して、氏は此類の日記を作るに當りて左の如く言へり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此の觀察はサレイに言へる如く單に父親のみにては到底充分なると能はざれば、必らず母親の協力を要すべし、されば此種の觀察を行はんとする人は豫じめ細君としては家人の同情を得て自己の不在中に於ける出來事も遺漏なく知悉するの道を講ぜざる可らず。余は此目的を以て小兒の能く言ひ能く歩む頃より、細君に命じ、小兒に代りて日記を認めしめ、毎夕之を撿し、尙ほ自己の觀察せる所を加へて、記錄に上すとゝせり云々。

此等の事業に、妻たり母たる人の共力を要するは甚だ多き所以を覺るべし。

夫れ、兒童研究の事や、研究の結果の能く公益たるのみならず、之を研究するほどに重んずるの心構へは、既に現在の吾子の上に非常の益を與へらるべし。其子を見て只だ頑是なきいたづらものと思ひ、面倒にして厄介なるウルサキ餓鬼の樣に言ひ去つて一顧せざるに比較し、何等の懸隔ぞ。

願くば、此事の研究いよ〳〵行はれて、小兒の天國と歌はれたる吾日本に恩賜されし可憐の愛兒が、聰慧にして思慮ある敎育の手に護られ、以て其の天稟を十分に開發せらるるに至らんとを、高島氏は其論文の結末に於て曰へらく、

余は小兒を研究して益々人心の靈妙を感じ、喟歎自から已む能はざるものありと。

眞や、小兒を研究するものは、其の天稟の既に絕大なるに驚ろき、人智開發の如何ばかり深遠なるとを得べきやに感謝せざるものはあらじ。語を寄す、天下慈愛あるの人の母よ、卿等何ぞ其の周密にして多愛の情懷を此事の研究に寄せ、もつて人と我との愛子をして、健全に聰明に發育するとを得せしむるの途に助力せざる。

男女の氣質（一）

近頃左の一書を寄せたる人あり、

拜啓小妹は女學雜誌愛讀者の一人にて御座候、今日までの雜誌上にてはしば〳〵婦人の性情につき種々御論說拜見致し候が男子の性情また其理想的婦人とは如何なるものか後日の紙上にて伺ふを得候はゞ幸甚の至りに御座候　以上

愛讀者の一小女

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

之を社中の女員に示すに、笑つて曰へらく、實に當然の要求にこそ。婦女子は自からの氣質を解剖せらるるに厭き果てたり、其の望む所は眞に男子の方々の氣質を知らんとするにありと。

吾等亦た笑ひて曰く、日本男子の氣質豈に知りがたからんや世上大抵の發現は皆な之を見めせば也。大凡の文學は男子の文學なり、大凡の交際は男子の交際なり、男子は大聲疾呼するに慣れて隱くすとに拙なし。一戶の家、父か兄か果た弟か、凡そ一人の男子なきはあらじ、就て以て其の言動を察すれば直ちに明白ならん、何ぞ亦た之を記すに足らんや。但だ夫れ日本女性の氣質は、古來、物の本にも、文學にも、交際にも、陽に見されたるは尠なし。偶ま知れる所の女性は如何がはしき世すぎに人となりて、他の玩弄を業とする類の標本なれば、以て清潔なる婦女子の氣質を代表せしむ可らず。男子こゝをもて女性の粹を知らず。或ひは誤解し或ひは輕蔑す。これ女性の解剖の大いに講ぜざる可らずして、男性の解剖の等閑に附すべき所以なりとこそ思ひつれど、今ま既に要求あり、之より時々筆を此段の事に着くるも亦た興なきにあらずとは言ひ合ひぬ。

玆に多くの女性が暗に心に懷く普通の意見あり。曰く、女の心は到底、男子に分るものにあらず、男子が能く女を見分けんとは、殆んど出來難きと也と。此は思慮ある婦人にして尙ほ屢ば發する所の告白たり、むしろ男子の批評眼を輕蔑するものと云ふべきか。いでや此の一事より先づ男性の心搆を說かん。

抑も、多くの婦人が男子に對して斯る告白を爲らるるの主旨や、必ずしも男子の批評眼を輕んずるにはあらで、むしろ、其の女同士の耻辱の故に立言せらるるには非ざる乎。そを如何んと云ふに、女は皆な表をつくり、人前を飾り、如何に正直なる婦人にても、われ知らず其場をよくして、面躰を調ふるものなれば、大氣にして無頓着なる男子の性として、迚も其眞僞を見分けらるるとは出來まじ、口頭の信切を眞に思ひ舌三寸の愛嬌にたぶらかされて、其眞相を看破せざるが滔々たる男子の常とす。顧みれば、女は狐にて人前をだます、われ乍ら嫌になるほどの虛飾ものゆゑ、男子が之れを見顯はさるるとの出來ぬは尤もなりなど分別して、扨てこそ男子决し

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て女性を知ること能はじとは言はるゝなれ。

此に至りて、男子の心構を言はんに、男子の女性を弄ばんとするものは大抵其の装ふ所に於てすれども、之が實際を知らんとする者は、曾て其の現れたる所に於てすることなし。女は元來內氣にして物言ふこと少く、遠慮がちにして直言するもの少きものと聞居れば、其人となりを見るに當りて、決して其の表面に於てすることなし。心ある男子は、女性の內面を見ることに注意す、其不用意にして無頓着なる處に視察することに注意す。常に心掛に見ずして變に臨みての覺悟に注意す。表の醜くして反つて內部の整へるは男子に於て屢ば見る所なれども、女性は不思議にも人の見さる所に取亂すの癖あり。之れ二六時中、愼しみに謹しみて、窮屈に取つくろひたる切めてもの慰藉にして、此の暗黑の小天地に於て初めて磊落疎放の我儘を發し、一種の氣休めを爲すなるべし。故に能く女性を看んとするものは、大抵、かゝる天眞の發露せんとする邊りに於て視察すれども、未だ曾て其の表裝に眩せられんとするものはあらず。

但だ夫れ美しく見するが女性の飾りなる如く、トボケルが男子の一癖なるべし。知つて知らざる如く、覺えて忘れたる如く、承知して欺かれたる如くするの工合は、殆んど其の天才とも云ふべし。是れ外部の交際を引受けたる名殘りにして、一種の外交技術とも言はんか。故に、女性を見て欺かれたる如く見する男子も存外其實を承知して、暫くトボケ居るものも多かるべし。是れ正直一圖にして思ひ返しのならぬ女性より觀ずれば、如何にも橫着至極にして、言はゞウソツキの如く見ゆるなるべしとは云へども、即ち是れ男子特得の化粧にして、其の自から裝ふ一種の飾りと看過せば差支へなかるべし。

一方にありて、婦人が其の氣質の男子に覺られがたきことを主張するとひとしく、男子も亦た其の複雜なる氣質が女子に覺られがたきことに言ひ做すを常とす。もし心得なき浮ものゝ狀態を言はば、男なりとて女なりとて一樣の事にて、固より人の眞實を見分けべき眼識はある可らず。人の氣質を知るの直覺は、過半は吾が心の誠より發するものゆゑ、此の素養なきものゝ他を誤解し易きは男女ともに然り。無論取分けて言ふべきことにあらず。然し乍ら、男子の氣質が複雜にして深奥な

るが故に、大方は女子によりて覺らるゝとなかるべしなど獨斷するこそ心得ぬとなれ。女は男子の思ふよりは眞實にして深きもの也、よく人の心を讀み、情を理解す。就中、執念深くして事を苟且にせざれば、前后の矛盾、終始の調和などに對する記憶强く、筋路の通らぬとに承知せず、口さきの氣休めを深く嫌て十年終わるの大義を重んずると存外に切なり。故に女は、美服と、芝居と、南瓜と、氣休めとによりて籠絡するとを得べしなど思ふ男子は、未だ女性たるものゝ皮相をすら看取せざる也。彼女とも眞摯熱情なり、故に一種の直覺と、一種の讀心術とを有す。男子特有の氣質の複雜は容易に彼女によりて諒解せられざるべしなど、思惟するに係はらず、彼女は格外によく之を諒解するとを得るもの也。

兵法に曰く、彼を知り亦己を知ると。今男女互ひに相知らず豈に宜しきを得んや。其の相知らざるは、己を知るが如く知られじと思ふによりて知らざる也、これ異樣の隔絶と云ふべし。吾人は其の氣質を比較するに際して先づ此の一事を言ふ曰く、男女は思の外に相知るとの多きもの也、自己の氣質の人に知らるゝとの存外に多きもの也と。

大奥の朝夕　（鈴木林赤尼の談話）　八

○御臺樣は四ッ時までに御化粧をすまさせられ、奥にて上樣と御對面あり、御衣服は常に御襠なり夏は御附け帶なれど如何なる時も夏の外は御補襠を召し給はずして御對面あることなし。侍女は式日の外には補襠を着ず。御對面の時には御臺樣にも御褥をしけど、御遠慮にて敷かせ玉ふことなし。和宮樣は格別にて上樣より御褥をと御言葉あれど、他の御臺樣は全く上下の別あるものゝ如し。一ト口に云へば日々奥樣と殿樣が兩方より御出張にて御逢になると思はばよし。九ッ時（十二時）まで其儘の御衣服なり其より少しの間は御坐所（御部屋と云へば妾と同じ意義になり决して御部屋とは云はず）にて御休息あり、此時は御被布など召すことあり。早や八ッ時となれば上樣の御成りあり、御臺樣は朝の如き御衣服にて奥へ御出になり御對面あり、夕方また御坐所へ御歸りになる。上樣の大奥へ成らせ給ふことなき時は「歌ガルタ」「香」「茶」「和歌」などの御慰みあれど多くは歌ガルタにて百人一首の外に古今集等の歌集或は魚盡し鳥盡しさまざまの新意匠のカルタあり、又撿校、お狂言師など御慰あれど近頃は稀なりき。

○御言葉は御臺樣は將軍家の御事を上と仰せられ上には今日云々上には御機嫌云々などゝ仰せらるゝなり、將軍家は御臺樣の御事をアナタと仰せられ、又侍女には其名を呼びソナタ、或はオマヘなどゝ仰せらるゝなり。侍女よりしては代名詞を用ひず言語の前後の關係を以て辨じ、或は新御殿などゝ敬語を以て語るものと知る可し。

○朝夕の御膳は一汁三菜にて二の膳つきなり、御給仕は御中老お小姓などにてお年寄りは席に出でず、上樣は黒塗八寸の御膳にて式日は梨地の掛盤なり。上樣が御酒を召しあがり給ふ時は御紋附の銀の燗鍋にて御對手と云ふものもなく中老などに賜はることあれど。御前にては呑まぬが規則なり。

○侍女も、安政二年横井小楠が柳川藩立花壹岐に答ふる書中に、御城御女中纔數壹万餘人と承はり申候、古へ後宮三千と申候へども三倍にも至り弊事の第一云々とあれども、實際は少數なりき。

○上臈二人（小上臈一人）堂上方の息女にて姉小路、万里小路など云ふ人ありき。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

御年寄二人、中年寄三人、御中老十人、君側一切の御用を勤むオ゚キ゚ヨ゚と稱へて將軍の愛顧を蒙むらざる者なり、お小姓二人、表使二人、御祐筆三人お次六人、吳服の間四人、御三之間六人、御仲居四人。オハシタ十五六人、お犬小供、お茶の間四人等なり五六十人に過ぎず、これは新御殿即御臺樣附きのみにて、大奧には上﨟二人、小上﨟一人、お年寄三人、御中老四人位、お客あしらひ三人、御錠口二人、平のお錠口四人、お錠口助け三人、表使五人、お祐筆七人、吳服間七人、お次十人、お三の間八人、お仲居五人、お伽坊主四人、火の番五人、使番十人、オハシタ三十三人あり、これに姬君たちの侍女を加へて算するとも後宮三千の美女を擁することは能はざるなり。何事も幕政の頃は上下の事情の井通せざるより槙﨑の如き大家をも謬らしむること多し。この侍女は今の勅奏判の等級の如く年寄以上は敕任にして、三の間以上は奏任の如し。お三の間より以上は勅任にして、三の間以上は奏任の如し。お三の間より以上は旗下の女子に非らざれは勤仕することも能はず、仲居、ハシタと雖も御家人の子女に非らざれば勤仕すべからず。

○侍女の給分は三の間にて一ヶ年給二十兩に三人扶持、毎月薪炭百匁に菜代もあり、なかなか豐かなるものにて下婢一人をつかひ或は二人にて一人をつかふ。其部屋も三間あり湯殿臺所もあり庭も少しはあり、買物は一切城外へ出づることなければ、諸商人の手代番頭が一定の所に諸品を備へ置くゆゑ、下婢をやれば何品も坐して買ひ得らるゝなり、城外の住居となりて不便を感ずること多しとかや。されどお年寄以上となれば五十人扶持も給はり、其居間其生計驚くべき豐富なるものなり。

◎臺灣新設女學校の狀況

臺灣學務部は、女子教育の普及を計りて、五月廿五日を以て八芝林國語學校内に一女學校を開始したり。開設の狀況、同校の教務高木平太郞氏より、在京の伊澤學務部長に宛てたる書中に見ゆ、曰く

校舍の義は、先月下旬に全く修繕を終り申候へ共、何分造花機械到着不仕候爲め、乍不本意遂に開校も延引仕候事に御座候。然るに本月廿二日機械到着の報知を受け、早速領收仕即廿五日を開校の事に相定め申候。最初入學志願者四十八名有之最長年齡廿九年二ヶ月、最少年齡六年一ヶ月、平均年齡十五歲九分、隨分不揃の生徒には御座候へ共、兎も角多數の志願者に有之候間喜び罷申候處、一昨廿四日午後に至り突然七名の生徒を失ひ申候。そは他にも無御座當時は御承知被成下候通、茶製造の時季に際し居候爲、七名共に其方面に吸收し去られ候事に御座候。初めより製茶の爲めに、幾分女學校の事業に障碍を加へられ申候事は、覺悟致し居候事に御座候へ共、七名の多數を一時に奪ひ去られ申候には、今更の如く被考申候。乍併木原女教師の此技藝に精通せられ居候事と土人教師の溫良なるとによれば、充分製茶の障害には打勝得候事と信し居候。昨廿五日開校の當日六名の生徒を假入學に致し候。初め柯秋潔其他より續々申込有之候へ共、經費其他にも際限有之候事故、志願者四十八名にて、一時入學を拒絕致し居候事に御座候。然るに開校の當日女生徒が三三五五袂を連れ、來校いたし候有樣に誘はれ、最初拒絕いたし候にも不關、父兄或は老母が少女を携へ出校致し候向も有之、兎に角其筋へ御報告致し居らざる生徒を假入學と仕候事に御座候。以前七名を失ひ後六名を得申候故、都合四十七名に御座候。昨廿五日は折惡しく朝來雨天に御座候故、生徒の出校は如何哉と懸念罷在候ところ相定め候時限に先たち來校いたし候者も多分有之實に案外に考申候。乍然當日は病氣のもの五名は欠席仕其他十一名は通學距離少し遠く御座候爲め、或は他の事故の爲めに來校不仕、出席者は三十一名に御座候。然し大抵父兄或は老母が付添居候爲め、隨分賑ひ申候。當日は別段儀式を擧げ候次第には御座なく、唯生徒と父兄とを集めて、心得等を申聞し候事に御座候間、校長も御出無之主事より談話有之候事に御座候。何れ後日始業の式を擧行いたし候必要可有之かと存じ申居候。一應の談話を終り候後、幸承り居申候内地女子製作品を本校を經て編纂課より拜借仕、一場に陳列いたし、且小生共の手許にも少々集り居候手藝品を併せて生徒及父兄等に縱覽爲致申候處、皆物珍らしき摸樣、且つは彼等中流以上の女子が四五十名も一處に集り候事は未曾有の事とて、何れも談話を終り候後凡そ二時間計も在校仔細に見物いたし、十一時頃歸宅仕候。殊に造花は、初め皆眞物と相考へ居候摸樣にて、此花には香なしなど申出で、後に造花なるを知りて呆然として言葉なき有樣など、充分彼等を刺戟いたし候事と信せ

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

られ申候。圖畫寫字等に至りては、彼等女子には、之を見る眼御座なく候故、壁方も御座なく候へ共、父兄の贔屓は、又之によりて大に打撃され申候摸様相見え申候。午後は人民の縱覽を許し候ところ、士林附近の女子、母は子を背にし、少女は老母を助け、雨を冒して來校いたし、當日は約百名餘の來觀者有之、監督及說明に多忙を極め、實に案外の結果を得申候。殊に女子手藝品の爲めに刺戟せられ、其席上にて兒女の入學を乞ふ父兄も有之候樣の始末にて、万事好都合に當日を終へ申候。尙此摸樣にては、續々入學志願者も有之候事と存じ候。充分注意に注意を加へ處分いたし候覺悟に御座候。……………

當分の內授業は、右の時間割にて教授いたし候事に相定め申候。

臺灣裁縫十二時間　造花六時間　編物六時間

勿論向ふ一ケ月間には、先づ日常會話を授け、漸を逐ふて修身唱歌をも課し候考案に御座候。閣下の御歸臺までには、君が代の唱歌位は、歌はせ度豫想いたし居申候。未だ授業開始不仕候故、容易に斷定は下し得ず候へども、國語教授も決して厭ひ不申と考へ居申候。殊に父兄の中には、讀書教授を望み居候者も御座候云々。

尙々今朝(五月廿六日)は生徒三十五名出席、第一組(年長者)は既に薔薇の花を造り居申候。第二組(年長者)は机によりて、針の持方等習ひ居り申候。

これぞ我邦人が新領地の爲めに、初めて經營したる女子教育の現狀なる。以て該女學校の性質幷に土人の意向等を知るべきなり。

白知教育の語に對する評

本誌第四百四十四號は、其社說『白痴の嘆』に於て、白痴教育府に起らんとするに際し、其名の穩當ならざるを以て、冀くは新熟辭を得んものと、試みに白知教育の語を案下て、有識の評言を乞ひたるが、爰に『日本』新聞は、其七月五日の紙上に於て、之が爲めに著實有數の評言を下せり。今左に之を轉載す。

痴字の病冠を假除し知に作りて、以て從來慣用せる所の語音を換へずして、頗る清潔有趣味の名を命ぜられたること先づ以て多とす可し、吾人は双手を擧げて賛成せんとする因みに、聊か蛇足を添へん乎。大學或問に曰く「知は即ち心の神明、衆理を妙へて萬物を宰ざる者なり」と乃ち通常白痴者と稱する者も、畢竟知の未だ暗昧に屬せる者に過ぎざることは、所謂る泰西教育法の證明したる事實なれば、其の精神的不完全を指して、直ちに白痴と謂ふことを得ん、並し教育其の者に體認せられざる可らざる肝要本分なればなり。想見す西曆千七百八十七年米國紐育府に於て奴隸解散の旨趣に成りける一會社は、創めて數個の亞非利加自由學校を府內に設立し、越えて千八百三十八年に至りしが、其の教師は亞非利加學校即ち黑人學校の名辭適切ならざるを嘆し、カラールド、スクールに改稱せんことを請願せしことありしを、現に角教育の名辭の如きは、未來永久に傳稱せらる可き者、かの國家教育など謂へる漠然たる名辭を下して誇色あるが如きは、須らく避く可き所たり。而して教育作業の實際は被教育者の從順に起る、如何なる白痴者たりとて該教育者に多少信憑する所あるときは授知の手掛かりは既に判然存在せるなり。況して何國にても碩學大家の如きは往々その幼少時期中には純然白痴に似たる者ありしも、史傳に多ければ、かの白痴者の精神裡には却りて水の潜熱如き狀態にて大才を包含せることの多きやも未だ知る可からず。之が教育は現にも角にも多望なりとや謂はまし、さて藤本氏が素白の意味にて白字を知字上に冠らしめしこそ頗る面白けれ、何となれば教育の色附けにして惡しくば、赤ン坊育二才の類にて終らしむ可きも、其の法を得ば、七色完備以て明、綽々たる知者たらしめ得可き理屈の附けらるればなり。

道のべの清水ながるゝ柳かげ
　しばしとてこそたちどまりけれ　　西行

なつ山のかげをしげみや玉ほこの
　道ゆき人もたちどまるらん　　貫之

ゆく末はまだ遠ければ夏山の
　木の下かげはたちうかりけり　　躬恒

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

西郷南洲と勝海舟（下）

落花淡人

誰か言ふ老莊は是れ出世間の法を説くと。一々に是れ大俗の爲に立論するにあらざるなし。今の政士の政事を言ふや、魚を羮て屢動かし、毛を吹いてこと更に疵を求むるに類す。煩瑣にして局促、惟れ日も足らざるが如くにして而して一事の能く成すあるとなし。政治上の老莊を知るものは、近世にあつては夫れ唯だ南洲と海舟となる歟。

逸を以て勞を迎へ、無意識を以て不用意に接す、玆に於てか打撃、神に入り、精靈よく貫徹す。凡そ爲政の訣、他あるとなし。放任して自然に生計せしめ、只だ大綱を提げて大事を睨み、機先を制して民心を倦ましめず、蒼生毫も着目せざる處に裕に機輪を轉するの手眼、乃ち是れ政士第一の緊要なり。先聖後賢皆な此衣鉢を傳へ、歴世隨時に無爲の大有爲を了す、而して世人多くは知らざる也。後人如何んぞ能く史乘の形跡によりて之を窺ふとを得んや。百代の下但だ英雄よく英雄を知る、大人の心胸は豈に小見地によりて忖度し得るものとせんや。

惟ふに、今の政士の爲す所の如き、大率ね國家の生命に些少の影響あるとなし。審議立案して机上に法例を草し、口角沫を飛ばして演壇に慨説すとも、其の實際に益なきこと勿論なり。所云る國務大臣の忙々然として閣に議し院に論ずる所のものゝ如きも、畢竟は書記官の當に任ずべきものゝみ。國家の大事たるもの安くんぞ左樣に多く左樣に淺薄なるものとせんや。曰く、閣上に大事を論ずと。抑そも大事なるものゝ然かく論ずべきものならんや。論ずるは疑ふものある也、疑ふあるは惑ふものある也、既に疑惑して互ひに論究すと云ふ、抑も斯の如き閑隙と斯の如き公然とのあるものに遂に何等の一大事かあらんや。凡そ此般の論題は論を好むの徒に一任して可なり、國家眞誠の大臣たるもの何すれぞ之に拘束せられんや。南洲と海舟との如き、殆んど此般見識の事を念頭に置くとなし。如此き時は大率ね衆說に任せて別に其の成り行きの爲に備ふなるべし。漫然放談し若くは冷平歸臥して之に關

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

せざるが如きは、素より其處なり。

一新の機了れる後ち、南洲の郷村に隠れたる、海舟の大抵平臥して一世を冷眼視せる如き、眞に大機を念ふの徒をして爽快に禁へざらしむ。夫れ忙々役々奔命に疲れて、切りに書生輩と伍を同うして議論するの大臣先生を見て之を欣するの傑士あらんや。今の大臣たるもの少しく識者の評論を顧みて、古來の大人の修養に學ぶ所あるべき也。

論者往々南洲を目して其伎倆なきを擧げて政治家の資格を疑ふものあり。斯の如きは抑も政治の訣を知らざる也。堯舜は聖なる乎、抑も政治家なる乎。もし能く茲に發明する所あらば、忽ちにして頓悟せん。曾て傳ふ、横井小楠の米國合衆國の政治を聞くや、直ちに一喝して曰く、之れ堯舜の政治也とあゝ王代の自治政躰を看破して、爲政の大局を窺がひ知るに非るよりは、南洲の横着にして馬鹿らしき邊の消息を了悟するとあらじ。

人多く齊彬公、南洲を用ゐたりと云ふ。眞に然り、齊彬は唯だ西郷吉之助を以て藩中唯一の人才とは爲せり。夫れ既に人才とせり、此をもつて其才を老ならしめんとし、曾て早く之を重用したるとなし。安政井伊の大决獄ありし前後、南洲が齊彬の意思を含みて東西に運動せし如く言ひ做すが如きは、抑も齊彬公を知らざるのみか、大人育英の胸秘を悟らざる也。南洲既に老練して、薩の健兒に對するの爲躰亦た此の衣鉢を傳ふ。茫々漠々たる西郷先生の眞消息を理解し得たらんものは、固より尠なかるべし。遂に誤つて先生を神輿に擔ぎ、無益の戰を發し、以て姦を拂ひ國に益すと思惟せり。而も先生は微笑しつゝ其の無益同樣の軍配中に身を擲つことを辭せざりき。

日清戰爭の將に開かれんとするや、國中皆な狂す。獨り卓然として其の不可を論じ、「其軍更無名」と主張したる海舟は殆んど春畝先生と巳代治との爲に一笑に附せらるゝ所なりき。而して、戰勝の結果着々として其の預言に中り、人心萎靡し、經濟大膨せんとするに近づきて、初めて氷川老伯の冷言は往事をのみ繰返すものにあらざるとを覺らんとす。嗚呼、人を見るの明も亦た晩い哉。

隨感

祇王祇女ほとけの悟り

梅雨しよぼ〳〵と降りつゞき、書窓晝尙ほ暗らく、來客稀れなる時、只だ心遣りに平家物語評判秘傳抄と云ふ例のあやしきものを取出でゝ讀流しけるが、祇王の巻に及んで事々しき批評の片腹いたくもあり、殘り惜しくもあり、何やらん太く恨めしき心地もして、久し振にて平家を朗唱しける。此は何事の感激やある、自づと胸せまりて聲出でず、涙うるほひて目も見えがたくこそなりたれ。暫くして念ふやうは、婦人の悲しき事、悉しがたし、妓王の歎き千古の情を動かすに足る、われ試みに憂ひを寄せて其の遣る瀬なき物思ひに伴なはんとて、秘傳抄にならひて一節一節を區切り、我心の同情を添へんとはする也。餘白すくなきまゝ紙上にわざと人の知れる物語の文を其まゝ轉載するは、讀者の更めて之を讀み、其涙を手向け玉はんことを求めて也。此の文の筆者もと明らかならず、何時の世の多恨の文士なるらん、百代の下脈々として吾等の血を動かすものありて存す。あゝ情の至れるものまた切なる哉

世人云ふ情をもつて輕んずべしとなす莫れ。

◎其ころ、京中に聞えたる白拍子の上手妓王妓女とて姉妹あり。刀自といふ白拍子が女なり。然るに姉の妓王を入道相國寵愛し給ひし上は妹の妓女をも世の人もてなすこと斜めならず。母刀自にもよき屋造りて取らせ、毎月に百石百貫おくられたりければ、家内富貴して樂しき事なゝめならず。

榮華滿朶の春の曙に、落莫たる秋の哀れを念ふものは多からず。妓王の出世を羨みて其の多福にあやからんとし、妓一妓二など名をつけて縁起を祈らまくするもの、誰か末期のつれなきことを想像せんや。母刀自は仕合せものにて、妹まで時めけり。位入臣を極め、かしこき所に血縁をつなぎ、日本六十餘州を掌に運らさんほどの豪の人に思はれたる女こそ實にも果報ものなるべけれ。邯鄲一睡の夢、覺むれば三年も昨宵の心地ぞする。花開き又落ち、月滿ち又缺げ、西八條の常世の春にも秋風と云ふものは吹き初めけり。

◎かくて三年といふに、又白拍子の上手一人出で來り、加賀の國の者なり、名をば佛とぞ申しける、年十六とぞ聞えし。京中の上下是を見て、昔より多くの白拍子は見しかども、かゝる舞の上手は未だ見ずとて世の人もてなすことなゝめならず。或時、佛御前申しけるは、我天下にもてあそばるゝといへども、當時目出度榮えさせ玉ふ平家太政の入道殿へ召されぬことこそ本意なけれ。あそびものゝ習何苦しかるべき、推參して見んとて、或時西八條殿へぞ參じたる。

遊びものゝ習ひとは申し乍ら、一天万乘の尊とき御方を除きては、唯吾一人とも言ふべかんめる權家の門を叩き、十六の乙女、われから薦めて藝を賣らんとする心意氣こそ恐しけれ。女に涙の武器あり、白拍子に舞の秘術あり、傾國の媚を呈して武門の大將を生擒せんは、この道の人の譽れなるらし。抑佛こそたゞものならじ。何事にか矯激して數寄に趣ぶれ、自から異様の名を冠ぶりて、ひそかに當世を弄ぶ。一朝飄然として忽ち覺るは素より其の氣品によれり。

◎人御前に參りて、當時都に聞え候、佛御前が參りて候ふと申しければ、入道相國大に怒りて、なんでう左樣の遊びも

のは、人の召にてこそは參るものなれ。左右なく推參するやうやある。其上、神ともいへ佛とも云へ、妓王があらんずる所へは叶ふまじきぞ、疾う〱罷り出でよとぞの給ひける。

入道相國未だ佛を見ざれば、淫れ男も心を動さんやうなし。夜々宴樂に、内氣の妓王を枕にして、唯々として只だ仕へまつる美人あらん限り、もとより風流を好まざるものゝ、別して舞を見んとするたしなみもあらず。性急にして驕慢なる入道は、赫として只だ怒るのみなり。憫れむべし、美人門前に空しく立ちて聲色を通ずるの途なし、遺恨悄然として將に車を返さんとす。此時、幸か不幸か、機一轉の妙あり。人情の美、わざと事を起して波瀾万丈の風浪生ず。惟ふに惡魔、巧みに人情の曲折にあやつり、好意の名の下に意外の珍事を惹起し來る。現世の狀態、大率ね皆然り。

◎佛御前は、すげなういはれ奉りて、既に出んとしけるを、妓王、入道殿に申しけるは、遊びものゝ推參は常の習にこそ候へ。そのうへ年もいまだ幼なう候ふなるが、たま〱思ひ立ちて參り候ふを、すげなう仰せられて返させ玉はん

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

こそ不憫なれ、如何ばかり恥しう片腹痛くも候ふらん。我立し道なれば、人の上とも覺えず、假令ひ舞を御覧じ、歌をこそきこしめさずとも、只だ理を枉げて召し返して、御對面ばかり候ひて、かへさせ玉はゞ、ありがたき御情にこそ候はんずれと申しければ、入道相國、いで〳〵さらば、わごぜが餘にいふとなるに、對面して歸さんとて御使を立てゝ召されけり。

我立し道なれば人の上とも覺えず、御對面ばかりも許させ玉ふべしとは、思ひ遣り深き情の言の葉なり。婦人、やさしき時は、人の上を我身に引くらべて、慈み最も切なり。あそびものゝ習ひにて、門前より追はれたらんとの、恥高きは其の能く知れる所。ましてや情ふかく、心内輪にして、物の哀を知り、かねてより無常の流轉にやゝ思ひつきけん妓王の心には、只だ何となう思ひせまりて、棄てがたくやありけんかし。

◎佛御前はすげなう言はれ奉りて、車に乘りて既に出でんとしけるが、召されて歸り參りたり。入道やがて出であひ、對面し玉ひて、いかに佛、今日の見參はあるまじかりつれども、妓王が何と思ふやらん、餘りに申しすゝむる間、斯樣に見參はしつ。見參する上には、いかでか聲をも聞かであるべき。先づ今樣一つ歌ふべしとの給へば、佛御前承はり候とて、今樣一つぞ歌ひたる。

　君を始めて見る時は千代も經ぬべし姫小松
　　御前の池の龜岡に鶴こそ群れ居て遊ぶめれ

と押し返し〳〵、三返歌ひすましたりければ、見聞の人々皆耳目を驚かす。入道も面白き事に思ひ給ひて、さてわごぜは今樣は上手にてありけるや、この調にては舞も定めてよからん、一番見ばや、鼓打召せとて、召されけり。打たせて一番舞ひたりけり。

魔王やうやく蛇眼をながしめにして、好色の邪慾沸々として胸に溢れ來る。戀思一と度び轉ずるときは亦還らず、入道が懸想は既に、羽衣翻翩、落花繽紛たる所に恍惚として飛び行いたり。

◎佛御前は、髮姿より始めて、見目貌世に勝れ、聲よく節も上手なりければ、なじかは舞は損ずべき。心も及ばず舞ひ澄したりければ、入道相國舞に愛で給ひて、佛に心移され

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

けり。佛御前、こは何事にて候ふぞや、もとより妾は推參の者にて、既に出され參らせしを、妓王御前の申樣によりてこそ召し返されても候ふなれ。はやく暇賜つて出させおはしませと申しければ、入道相國、すべて其儀叶ふまじ。但し妓王があるによりてさやうに憚るか。その儀ならば、妓王をこそ出さめとの給へば、佛御前、是又いかでさる御事候ふべき。共に召し置れんだに恥しうさふらふべきに、妓王御前を出させ玉ひて、妾を一人召し置れなば、妓王御前の思ひ玉はん心の中、いかばかり恥しう、かたはら痛くも候ふべき。おのづから後までも忘れ玉はぬ御事ならば、召されて又は參るとも、今日は暇を賜はらんとぞ申しける。入道、その儀ならば、妓王疾う〱罷り出でよと、御使重ねて三度までこそ立てられけれ。

嗚呼、戀愛の頼みがたき、花の色の衰へ易きにも優れり。雲となり雨となるの情懷は手を飜すの變化よりも猶早し。昨夜終生を契りてし愛の唇は、今宵叱咤して呪をあげんとす。秋波の眼は、憤怒の眼にゆづり、憤怒の相形は忽ち愛着の痴態と化しぬ。愛情の消え易き猶ほ忍ぶべし、人情の頼みがたき夫れ如何んせん。錦繡は依然として身にあり、半座の褥猶ほ去りがたし、ひとり郞の心の轉ぜしを如何んせん。佛の惡らしきにあらず、入道の怨めしきにもあらず、只だ女性の果敢なきを如何せん。なまじひに榮華をうたはれて、京洛の人に羨やまれ、果報もの〻例へに乘りし冥加の末期如何んぞや。生れて婦人となり、托して變り易き男子に添べしとは、何時の世よりか何もの〻定めたる。あぢきなくも、はかなきは、女子の一生にぞありける。

◎妓王はもとより思ひ設うけたる道なれども、さすが昨日今日とは思ひもよらず。入道相國如何にも叶ふまじきよし、頻りにの給ふ間、掃き拭ひ塵拾はせ、出づべきにこそ定めけれ。一樹の蔭に宿りあひ、同じ流を掬ぶだに、別は悲しきならひぞかし。いはんや是は三年が間、住み馴れし所なれば、名殘もをしう悲しくて、甲斐なき涙ぞ進みける。さてしもあるべき事ならねば、妓王今はかうとて出けるが、なからん跡の忘紀念にもとや思ひけん、障子に泣く〱一首の歌をぞ書きつけける、

萌え出るも枯る〻も同じ野邊の草

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いづれか秋にあはではつべき。
さて車に乗りて宿所へかへり、障子の内に仆れ伏し、只泣くより外のことぞなき。母や妹、之を見て如何にや如何にと問ひけれども、妓王、とかくの返事にも及ばず、具したる女に尋ねてこそ、さることありとも知りてけれ。毎月送られける百石百貫をも押し止められて、今は佛御前の緣の者どもぞ始めて樂しみ榮えける。

物案じに沈みがちなる妓王が心には、花の開落によそへて人の哀れを兼てより期したり。變り易き入道の思ひものとなりては、何時かは苦しきことを見る折のあるべしとは覺悟しつれど、あさましきは人情の迷ひかや、さすがに昨日今日とは思はざりけり。言ひ出で玉ふては寸時も猶豫せぬ入道の性急に、使三たび迄立てられて追ひ拂はる。堪へぬ心を僅かに支へ、胸は涙に張り乍ら、來ん人の爲にとて潔きよく掃き拭はす、甲斐〳〵しくも優しかりける。住なれし家居に何の無情かある、ものふりし樹立庭草、露をふくみて別れを惜しむ、金閨玉帳に名殘りして、朝夕かしづける人に面伏せなや。恨むとにはあらぬ憾みは、さすが女氣の、誰に聞けともなく一首の激氣を書きのこしけり。實にや、春の野に萌え出でゝ之より花の盛りに時めかんとするも亦た草なり、秋の野末に枯れんとするも亦草なり、一樣同根の草、何れか寂殺たる終を免かるゝことを得んや。そは悟りても我未だ悟らず、言ひ放ちても倘ほ言のこせる心地しつ、滿腔の歎き拂へども去らず、僅かに車中に泣きくずをれて宿所へ歸り、仆れ伏して物をも得言はざりけり。

◎京中の上下、此由を傳へ聞きて、まことや妓王こそ西八條より暇賜はりて出されたるなれ。いざや見參して遊ばんとて、或は文を遣す者あり、或は使者を立つる人もありけれども、妓王今更又人に對面して遊び戯むるべきにもあらねばとて、文をだに取り入るゝこともなく、まして使者をあひしらふ迄もなかりけり。妓王、是につけてもいとゞ悲しくて、かひなき涙ぞこぼれける。

あゝ心なの世の人や、洛中のたはれもの手を拍つて言傳へ、相國の思ひものたりし人こそ目出度けれ、いざ自由にして呼びて遊ばんなど樣々に言ひ越しけり。之を無禮なりと言ひ棄てん義理もあらざりけり。白拍子の子は所詮人の弄びもの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とや定まりけらし。昨日まで羨みしは、冷やかに寫り、今日まで嫉みしは、慶びをや言ふらん。人情の變轉、掌を返すが如く、返りて常に淺間しき方にのみ趣むくぞ切なけれ。客を辭し、世をはかなみ、表にちとも顏出しせず、鬱々たる木影の小さき住居に、病めるが如く、此年を送りぬ。

◎明くる春にもなりしかば、入道相國、奴王が許へ使者を立てゝ、いかに妓王、其後は何事かある。佛御前が餘りにつれ／＼げに見ゆるに、參りて今樣をも歌ひ、舞などをも舞ひて、佛なぐさめよとぞの給ひける。

春の花衣粧をこらし、人も浮立つ頃となりつれど、妓王のみはたれこめてありしわび住居を俄に驚かすこそ、好色の老狂春に耽つて、愛姫に媚を與へんとはするの所望なりけれ。別段の催しもあるべきに、妾を招いて恥かゝせ、昔し同もにせし枕席を遙かに拜みて、人の餘興に舞ひ歌へと仰せらるゝは何事ぞ、人のつれなきにも限りこそあるべけれ、婦人一代の恥辱之にますものやあると、內氣の妓王は只だ胸せまりて泣ふしたり。

教　育

上杉鷹山公の教育

曲　浦

德川氏三百年の治世、國內の大藩小藩、中明君賢主を出せしもの尠からず、其最も名あるもの、水戶義公といひ、松平正之といひ、細川重賢といひ、池田新太郞といひ、松平樂翁といひ、上杉鷹山といひ、或は英邁明哲を以て聞ゆるあり、或は德義仁智を以て秀づるあり。中にも米澤藩主鷹山上杉治憲公の如きは、身は小藩たる秋月氏より入りて、年僅に十有七を以て大國の主となる。時恰も削封の後、藩政紊亂し、倉廩匱乏し、君臣上下共に甚だしく疾苦を訴ふ。公の此の弊餘に受くるや、志を決して、克己儉節の政を布き、銳意治を圖り先づ奢傲の徒を誅し、細井平洲、瀧鶴臺、澁井大室、南宮大湫を聘して、之に師事し、以て治政の道を諮詢して、遂に藩政釐革し、百廢具興し、倉庫充實して上は上杉氏の宗廟

を安んじ、下は百姓を綏撫し、加ふるに文を興し、武を奨め、殖產興業の途を開く等、其恩化餘澤は、米澤の民をして百世、治平に鼓腹せしむるもの、公の如きは、實に希世の英主といはずんばあらず。公の輔弼の臣莅戸大華記する所の『翹楚篇』中、鷹山公封を紹ぐの當時を述べていへるとあり、よく其狀を畫くもの丶如し。曰く、

公立つて家督し給ひし時の事なり、御藏元の逼迫せしは、實にも尤の事なり、其昔越州を領し給ひし比は、其御高も知られぬ程なりしを、百二十万石にて會津に移らせ給ひ、夫が上に半を減じて、十五万石を知し召たれば、君は元より大國の君、臣はおの〳〵大家の末なれば、君臣共に昔を慕ふ人情より其禮其格も分に越えたり。尤も俸祿こそ其時々に減じたれ、大小の諸士凡そ五千家に近く、其俸祿を通計せば、十一二万石にも至りぬべし。只夫のみか、治平の久しきに、其格其式のみ次第々々に大きく成來りし儘に、數十百万の蓄を添へて遣ひ來りしより、其年の貢をもて、其年の用に足るべくも非ず、出入豪家の者に御手を下げられ、利金息錢を費して過ごし來り給ひしより、御國政も御心に任せられぬとにはなりぬ。倘も漸々の衰へあらば、遂れ百姓の難儀、御家の危急にも至らせ給ふべきを、此事明らかに知し召しゝより、御家督の始めながら、御膳は一汁一菜を供さしめ、御服は木綿を召させられ、是を目當の儉約をと仰せ出されしなり。凡その人情始めあらざる事なく能く終りある事少き習なるに、御在位十九年、今既に隱居ましましてさへ、其儉を守らせ給ひて御膳は一菜に限り、御服は御下召まで木綿を召させられしなり。

治政撫養に肝腦を碎きたる公の英志や以て察すべし。公また孝養の志厚く、不具癈人の御臺所を愛護して、嘗て恨みず、其情懷おもひやるだに、涙溢るゝ計りなり。公のまた子孫敎育の爲に、心を用ゐられたる事や、其遺訓の如きは、千載仰いで拜聽すべきものあり。安永五年世子治廣公の初めて出府ありし際、其近侍に賜はりし『輔儲訓』の如きは、まことによく敎育の大道、其然るべきを說きて、頗る感佩せずんばあらざるものなり。中にいへるとあり、

◎總て敎と申すものは自得を貴び候事に候、一隅を擧げて三隅を反す共之れあり、憤せざれば啓せず、悱せざれば發

せず共之れあり候。强て此方よりの仕込にては、必向ふへ入る事の遲きものに候。只此方よりは、其緒のみを示し、向の樣子次第に隨て段々導き候と、鐘の響きに應じ候如く之れ有度候、何とやら手ゆるき事の樣に思はれ候へ共、之を敎の術とは申候。

これ今の世に所謂開發敎育の精髓をいふものに非すや。

◎子を育て候事も花樹に培するが如くなることに候春を待ちて莟める花を年の内より咲せんと色々種々の手入をし、室に入れ、火にあて候へば、其花咲とは雖も、陽和の時を得し花樹に比し候へば、其色香も薄く賞玩も是なく候。

◎專ら成長の時に臨み、强て成人の道を以て譴責せしめ候時は、英邁の氣象を折き或は病身となし又は手薄く成立候。

◎强て成人の道を以て督責せしめ候はゞ、英邁の氣長じ兼候と申事は、朝夕坐作進退の上に付て、是も宜しからず、彼も惡しと申て、狂ひ樂み申さる事を事なく止め候はゞ、幼稚の内、只居も相成らず、去れば迚止り候事も成り難き時は、去りとは迷惑なる事に是あるべく候。迷惑なる心より氣も縮み申ものに候。狂ひ樂み申さる事も、時としては、十分に是れ有り度候、其節は面々と痛み入り候得共、年を忘れて相手致し呉候樣に賴み入候、度に過ぎ候節は、其時事を構へて移し申べく候。移し易きも幼稚の習ひに候、唯々口に敎ふる事を愼み、事に敎る事を專要と心得申べき事に候。

之れぞ幼兒をして早熟せしめんとし、また大人の頭を以て、幼年の肩に繼がんとする、背理の敎育法を難じ、師はこれ生徒が忘年の友なれといふの要訣をいへるもの。泰西の敎育學者等の、この要訣を執へて、說論諄々、辯を費すこと多きものも、吾人はその鷹山公の明訓數語の中に盡きたるを見る。

◎千万句も入らず唯人君は學術に止り候……學術とは古聖人の道を稽古致す事に候。

◎性質と申すものは、迚も取替難き事に候。才を達し德を成すと申事も、皆其性來の持前を學術の力にて生育致候事に候。惡き性質の者も、皆よく學び候上は、其惡き事は、自ら知り得ることに候へば、强て性質の論には及ばざる事に候。去りながら敎導の日には、其性如何と云ふを知り得候はねば、敎の道を失ふ事に候。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎喜平次殿險忌の性も隨分是れあり候、其内仁恕の心も成程是あり候。險忌の性に深く頓着なく仁恕の心を長じ候樣に生育是あり候へば、追々險忌の性は薄く成行申べく候、此所能々勘辨是あり度候。

其善を擧ぐるによりて自から其惡を制し、其長を執るによりて、不知の間に其短を排するを法として、兒童の性質の長短善惡を明察することは、これ訓育の大法。

◎喜平次殿よりは面々の出精を重く致すへく候。是面々も浮世の雜談に詰所の疊を詰め候はんよりは、其德益も少からず、又は喜平次殿大なる進みに相成候。自分幼少の節、亂舞の事さして好まざる事故、出精も薄く候ひしに、大殿樣御好遊され候事故、附々も督責せしめ候を、自分幼少より附添候やすといへる婦人、今は廣瀨と申者に候、此者自分とひとつになり、經政の謠本を自から書き寫し、終に一番覺えて、自分に亂舞を進め候事是あり候、其品は兎に角敎の術をば得たる儀、婦人の志にはやさしき事と、今に感じ居候、此所能々勘辨是有度事に候。

といへるは、敎育者の自から精勵刻苦すべきをいひ、又

◎吝嗇の心性來にも之れあるべく候へ共、諺にも氏より生育と申事の候。吝嗇の心は、財の乏しきより生じ候事に候。取扱の上に其心得だに是あり候はゞ、さして憂ふる事は、是ある間敷候。其取扱方と申は、宜き品を少しく與へ候より、宜しからざる品を多く與へ候やうなることに是あるべく候。

◎喜平次殿才に不足は是なく候、才の餘り候より、物毎に心付も細かに、やかましく是有り候。細かにやかましきと此方よりも細かにやかましく敎訓致候ては、影を惡で趨ると申す譬の如く、愈細かにやかましく成行候。只日用の事を靜に大まかに取扱申べき事に候。

などいへるは、兒童を訓育するに、悠々餘裕ありて、物事大まかなるべきの祕訣を說くものにして、特にこれ未來人君の養成に最も欠くべからざるものたり。

◎喜平次殿當分剛氣に相見え候へ共、皆以て銳氣秀發するまでに候、剛氣は全く薄くこれ有り候、剛氣は根強く者に屈する氣なきを申候、銳氣はするどしと讀て切れ味はやり氣の事を申候、銳氣は人君に望む事には是なく候へ共、も

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

かし鋭氣を剛氣の種と爲さず候へば、剛氣を長じ候とは、是なく候。先々鋭氣を挫かず生育候內より、剛氣に轉じ候樣に是あり度候。

鋭氣はたゞに人君に望ましからざるのみならず、人皆な之を避くべし。世の敎育家諸氏、少年の鋭氣を轉じて、剛氣を養ふの術を得たりや如何に。

夫れ儲君を養ふて賢明ならしめん事は、これ祖先の社稷を安んずるの、第一の經綸なり。鷹山公の之が爲に、心肝を砕きて、鍛練自得の精神工夫を以て、其世子の敎育を計るもの、發しては、此『輔儲訓』の金科玉條となれり。此明訓また以て千載の規矩として仰ぐべきかな。今若し我邦の古今に亘て、敎育の經典を編せんとせは、吾人は先つ指を此明訓に屈せざるを得ず。

公の世子を敎育する慈嚴兼ね備はれると、此訓言を以て察すべく、特に天明五年に及んで、封を擧げて、世子に讓るの際、『讓封の詞』三條を記して、

國家は先祖より子孫に傳へ候國家にして我が私すべき物には是なく候。

人民は國家に屬したる人民にして我私すべき物には是なく候。

國家人民の爲めに立たる君にて君の爲めに立てたる國家人民には是なく候。

と規戒するもの、是れ實に千鈞の重さあり。鷹山公の十九年の治政日一日もこの規戒を忘るゝことなかりしならん。吾人はフエチロンのテレマクスを繙かざらんも、爰に人に君たるの道を聞く。

此外鷹山公の、儲君はじめ、庶子、孫女等へ、書き遣はされし訓戒其數少からず、皆以て敬聽すべきの箴言なり。其孫女の各々夫婿に歸するや、一々之に婦女の戒を訓するもの、慈悲溢るゝ計りの思ひあらしむ。第五孫女增姬君の生母卒去によりて、三の丸へ引取られし時に、御附女中に示したる訓戒『千代の春草』の中に

◎敎育と云は生れ出るより始めて、一日もかけて叶はぬとにて、段々と成長に隨て其時々の敎方育方も有事ぞかし。先々今の上は物柔かにして、其附添取扱ふ人々互に能く和合し馴合ひ、お增殿の側へよる時は、先我心を和して自己

の上を愼むこと、始にいへるそよ吹く東風、しと降る春雨なれ。知らず〳〵の內にいつしか感通の理り有て、先へ入るぞかし。增して乳など參らする折には、必しも心中を平にして、潔き心もて參らすべきとなり。只何事も春の日のうらゝかなるに悠々たる心持にてあらまほしけれ。

といひ、また第一孫女出府の節贈りし『老が心』の中に、

◎古は胎敎とて胎內よりして其敎育有り、まして出生の上は、幼稚のもの辨へなき內より敎育は大切なるとなれば、穴賢如在に思はるまじ。其敎育の仕方は、是も亦古人の敎へ詳に在ば其人に問求められよ。太室先生子を敎ふるは、母を敎ふるにしかじと常に申されしは格言とこそ思るれ。

といひて、やがて螽蟖の繁榮ありて母とならん時の心得を說きたり、また孫齊定公世子となりし時に、其近侍に示したる訓言中には、

◎幼稚の相手を致し候は、戲言戲動も無て叶はざる事ながら其戲言戲動の上にも可不可は是有事にて心を用うべき事に候。譬へば馬の眞似、犬の眞似は妨げなく候、人の聲音狀顏の癖杯まねて嘲弄する杯偶然と雖も、童蒙に示すべき事に是なく候。

と戒めたるあり。公の遺訓の今あるもの四十有餘篇、必しも少しとせず、皆これ意盡し、情盡せるもの、吾人百載の後之を讀んで、其昔を思ひ、其人を慕ふて、情滿つるの思ひなき能はざるものなり。殊に其遺訓の多くは人倫の敎育に關して述ぶる所、諄々切々、悉く鷹山公賢明の修練工夫に出づ、傳へて以て敎育家の規訓となすべきなり。吾人は治績大に仁德篤き米澤藩中興の君主としての上杉彈正大弼を畏敬すると共に、亦其身大藩の主にありながら、深く人倫敎育の幽微に悟徹したる敎育家としての上杉鷹山公を欽慕して止む能はざるものなり。

◎薩摩隼人の敎育法

當時薩摩藩の子弟を敎育するや、其學問としては、他藩の朱子派學もしくは陽明派學を採用したると異なり、主として、島津家の歷史談に基きたる敎科書を以てし、即ち夫の虎狩狀、島津歷代歌、及び島津日新公の「いろは」歌の如きものは、少年必修すべきの書物なりき、前二種は皆これ同藩主家の歷史に關し、後の「いろは歌」は島津家中興の主貴久の實父日新公の詠にして、修身の道を明かにせるものなり。日新公は不孝ものは斬首に處したる程の人なりしとぞ。

學問上の敎育は大畧以上の如くにして、而して社會の嗜好より受くるの敎育とし

ては、佛道、薩摩琵琶歌、方限の組織、島津家祖先の墓拜、曾我兄弟及赤穗義士夜討の當夜の所作等其重なるものなりき。

重野博士も曾ていへりしが如くに、薩摩武士の勇猛にして、毫も死を畏れざるは、其武道を磨くに佛道を以てしたるが故にして、薩藩に有名なる擊劍家は多く佛道を心得たり。薩摩琵琶歌はもと島津家の祖先忠久の、鎌倉より連れ歸りたる一人の琵琶法師より傳はり、當時は陣中の神祭に用ゐたるものなりしとぞ。然るに後は變じて、少年子弟教育の要具となりて、彼等の精神を鼓舞し、武勇を振起せしむるに預りて大に力あるものなり。

方限（ホウギリ）の組織とは、鹿兒島の城下を三十四の方限（組合の區別）に分ち、各一の頭を有し、規則を立て、青年の士氣を勵まし風紀を振肅するに勉めたり。各方限に格式定目とて道義的憲法の定まれるものありて、時々青年を方限に集めて嚴に讀み聞かせたり。この格式定目に反するの行爲あるものは、「チヨカチカラフ」とへて、義絕の制裁を受けて、士人絕世の耻辱とせられたり。義絕せられしものゝ他國し、または自殺せしもの甚だ多かりしとぞ。

薩摩少年は日新公及義弘の神社に參詣するを以て一要件となし、此參詣こそは、武士的教育に少からぬ影響を與へたるものなれ。義弘の神社に詣づるや、其命日に非ずして關が原大敗の日を以てす、蓋し嘗膽臥薪の敵愾心よりす。其當日となれば、城下十三個の學舍は廿歲以上のものは、甲冑を着し、其以下のものは、烏帽子陣羽織を着け、喇叭を吹き、旗を揃て、列を成して、勇ましく五里を隔てたる義弘神社に參詣すると、今日もなほ昔時に異なることなしといふ。

また曾我兄弟夜討の忌日には、年々青年等甲突川の沿岸にて、傘を燒き、以て彼兄弟を追懷するの意を表し、又赤穗義士夜討の忌日には、各學舍の生徒、徹夜して互に義士銘々傳を講釋す。其他侍踊と稱して、其實武備の檢閱を爲すことありき。又他藩と異なり、士族間に角觝行はれ、其外小笠原、伊勢二流の諸禮行はれて、士族は必ず其一を學ばざるべからざりき。容貌の檢査とて、兵兒二才にして、惰弱、華美の風をなすものは、嚴重なる制裁を受けたりとぞ。

以上は前鹿兒島縣尋常師範學校長生駒恭人の談話の教育時論に見えたるものより拔錄す。

◎帝國大學の組織

帝國大學は獨逸制を採りて、自由聽講を認可し、一定の年限を經たる後、志望によりて學士試驗を施すことにせんとする議案、將に高等教育會議に呈出せられんとす。吾人は頗る此變更あらんことを希望するものなり、此變更行はるれば、やゝ今日の大學の宿弊を洗滌するに足るものあらんか。此議案果して採用實施せらるとして、如何なる條目制度を採るや、知るべからずと雖も、當路の鬮襟を大にして、自由聽講の意義を出來得べき丈自由になし、また女子の聽講をも認可することあらんを望む。

◎京都帝國大學

京都帝國大學は、先づ工科を設けて、九月より開始せらるゝことゝなれり。日本人記者同大學に對する希望を述べて、其大學總長はじめ教授いづれも、東京帝國大學に匹敵するものを擧げ、殊に教授の如きは、大學出身早々留學を命ぜられたる、なほ無經驗なる學士輩のみを以て補充せずして、廣く民間に潛める有力の學者を攫任して、其威信あるの地位をつくり、東京大學の分校たるが如き觀なからしめんことを希望して、如斯くなるに於ては、兩者相拮抗して、互に進步し、且や東京帝國大學の萎靡を匡濟するに足るべしと論ぜり。

◎外國語の直用

大島正健氏『國民の友』に於て、ますりに、漢語漢字使用より生ずるの弊害多きを論じて、これが弊害を矯正せんとするには、漢語使用に限界を定めて、第一現今普通教育を受けたる人の平常使用する口語を以て文語の標準となすこと、第二別に語調をも害せず、一字にて事足るべきを、態々多字の熟語にて表す等の事を廢し凡て平易なる文字を擇みて使用する事、第三體言用言を問はず、自由に假名を混じて、文を綴る事の三條を呈出せり。而して論中、外國語を直用すべきを論じて、今や歐米の思想は、自由に我國に渡來し、自由に結婚し、自由に歸化せんとす。然るに彼と我との兩者に關係なき、漢語を以て、其の媒介となすは、これ自然の愛情より出づる兩者の一致和合を妨ぐるものなり。外國語は、むづかしき

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

漢語を借らずとも、雅語にもあれ、俗語にもあれ、我大和語にて、寫し得べきは之を寫すべし。寫し得ざるものに至りては、昔し漢語朝鮮語もしくは印度語を其儘使用したる例に倣ひ、是も亦發音の儘取りて、我語となすべし。ランプはランプにてよし、ストーブはストーブにて佳し、之を洋燈と書き、暖爐と書くも、些の進歩なく、却て不必要なる面倒を生ずるに至るなり。ホームはホームにて、家族家庭などゝ譯しても意足らず。クーデタア、ストライキ、ボーイコット等は、其儘にて用ゐるを大に妙あり。廣く諸國の語を吸收して、之を我生國の語に化せしむるは、大國民の特性なり。之を行ふに未だ漢語の軛を脱すると能はずといふに至りては、我自ら國民自己の性質を疑はざるを得ず。學術上の用語に一々漢字を以て、洋語を作るは、其利害得失大に考ふべき所なり。漢語は歐洲語の如く、自由の變化を許さず。將來學術、愈々發達すれば、其用語愈々緻密となるべし。然るに今一旦漢譯を施し、彼其用字に限あるに困じ、急に改造を試みんとするも、最早已に挽回すべからざる弊害に陷り、其時に至り、如何に悔るとも及ばざるべし。今にして一奮起を試み、何ぞ漢語を措いて、寧ろ直ちに原語を採らざる。我海軍の如きは、現に諸種の器具物品に原名を使用して、便益を感じ居るにあらずや。是をも顧みずして、心なく漢譯を用ゐれば、或は恐る、將來教育の進歩に大障碍を與へ、明治文學の歴史に大汚點を遺すに至るべきをを。現今の教科書に、漢語の多く使用せられ、之を學ぶに、少年子弟の、事柄を第二に措き、字畫の暗記に汲々たるを見れば、其無益の勞苦は、氣の毒千万と言はざるを得ず。

吾人亦頗る氏の此論に贊同す。彼の曖昧不充分なる理學、哲學、法理等の譯語に汲々として、字彙編纂に勞するが如き、寧ろ之を廢せんとを欲す。明治十年前後の小學教科書、假令は地理入門(?)の如きが、ゼオガラヒー、フヒジカル、ゼオガラヒーなどの語を兒童に授けたるの大膽、却て嘉すべきものあり。

◎臺灣人の教育素養

臺灣學務部長伊澤氏、近頃臺灣の公學に關する意見を述べたるが中に、臺灣人のこれまでの教育の普及に關していふ處あり、今左に其要點を指摘せん。

臺灣の人は禮儀を知らぬ、といふのは、一向無頓着なのです。例へば朝先生の前へ出ても、唯默つて居るやうな譯で、御早うございますとか、今日はとか云ふとは決して言はない。途中で知つて居る人に逢つても唯見てニコ〳〵笑つて行くばかり、一向頭を下げることも何にもしない、夫が當前になつて居る。臺灣にての習字の教へ方は、始め赤い字で書いてあるのをナスルとから始めて、其次には敷き寫しをする、それから臨本に向つて書くといふやうなやり方で、併し字は小さい。……　……一行書くにも何分といふ時を要する位。美術は書記の仕事である、我々は學者を以て任ずるのだから算術などはいらぬといふ見識で、彼學者といふても、算術の出來る學者は極く少い。それでども臺灣人は、事物を分析して考へる力即ち數理的の思想は、非常に乏しい……

……土匪などの起るのも此欠乏が、餘程の原因をなして居ると思ふ。

皆日本は臺灣より小さいと思ふて居た。それはどう云ふ譯であるかと云ふて、段々聽いて見ると、琉球を日本だと思ふてゐた。(記者曰く米國にて多少の教育ある人とへ、日本とジャバ島とを間違ふるもの少からず)

臺灣の學生は非常に唱歌を好む、概していつて見れば內地の學生より、臺灣の學生の方が遙か唱歌は上手である。

躰操は學生は好むが、餘人は、躰操を教へて兵隊にするのだといつて嫌ふ。

臺灣では躰罰は通常の事になつて居て、しかし人に打たれるのは、非常に耻とします。よつて此頃の首席教諭の諮問會議にて、臺灣にては體罰は行つて可なりと決議せり。

臺灣公學にては、國語としては、日本會話を主とし、讀書には四書五經（中孟子を除く）、と元田侍講の幼學綱要なり。諸學科の授業時間は、一週間小學にて二十八時間、中學にて三十三時間位のよし。時間數非常に多きやうなれども、これまで臺灣の學房の教授時間に比すれば、なほ少きものなりとぞ。

◎小學教員の補充

小學教員の欠乏はこれを訴ふるの聲到る處に聞え、莫大の供給を俟望しつゝありて、而して如何にして其欠乏を補充せんか、今なほ其策を得ず。文部、案を下せば、先きには師範學校々長會議の反抗となり、今又高等教育會議に容れられざらんとす。嗚呼如斯くにして、何の日に彼欠乏の補充を得んとする乎。

雑録

海舟先生詠草

魯士亞

水や空くぬちもわかぬ北の海に
羽をのす鳥の何あさるらむ

朝鮮

心してみさをさしてよ風あるゝ
ありなれ川にたてるあだ波

題しらず

人の世はかくやにほひしやま櫻
ちりにし後はとふ人もなし

月影のくまなくすめる今宵しも
世の浮雲はたゝずもあらなん

かき濁しかき濁しなば眞清水の
末くむ人のいかにうからむ

誠なき名こそ知られてそり〳〵は

時ぞとて咲いでそめしかへり花
さくと見し間にはや散なん

行年のかさなる數はくろかみに
おく霜しろく殘るなりけり

いかにして渡しや果む年ふりて
其名ばかりは眞間のつぎ橋

露のいのち消なばきえね草の屋に
足ふみのばすほども無き世に

荒はてゝ人もすさめぬふるまどに
名におふ月の影のさやけさ

うつり行世にはあるともみむ人の
まち知るまでの心ともかな

棹さしてこゝとをしへよ東なる
大江のみとに船ぞたゞよふ

君に背き父をなみしてむすぼれし
糸もほとけはすくふとぞ聞

利鎌もてうちもかりなむ此ごろの
小路したみち茂るよもぎふ

誠なき名こそ知られてをり〳〵は
とはるゝさへも耻しの身や

百とせもあはれ一夜の夢なれや
あれこそまされ千代田寶田

くり返す老のかごとは世に出し
そのうぶ聲の終りなるらむ

佛の座れむげたむばゝうら枯て
たゞしけれるは醜のしこ草

若草にころもかたしき一夜寢む
けふまさかりの花の下かげ

御身代り

鴎村

いざ事しあらばあれ、我こそは三代相恩の君の馬前に打死仕らんものよ、君の御命にも拘はる事のあらん時には、我こそは御身代り仕つて、適れ最後を遂げなんものよ、君父に仇なすものあらば、必ずや之と共に天を戴かじと、此等の覺悟は二合半の切米取つても、いやしくも主人の祿を食むものとしいへば、一刻一日、念頭に結んで忘るべからずとは、これぞ古來日本武士の、家に傳へ、子に敎へて、武士の理想眞に此處に在りとなしたるものにして、壽永の秋の暮、源平八島の合戰に敎經が射つる大の矢に自からかけられて、君の命を救ひたる繼信、はた又、自から竹の園生の御名を冒し奉りて、潔く腹かき切りて賊軍を驚かしたる村上義光の如きは、これぞ末世に傳へて、武士の典型と欽したるものにてありき。如斯きは封建時代に於て、始めて見るべきの美風にして、一國君臣の關係は一家主僕の關係に及ぼし、また町人百姓にも傳はりて、主君の爲めに水火を辭せざるを以て、人倫最上の美德となしたり。

然るに、我自ら主君の爲めに死すると能はずして、君の爲め他に捧ぐべきの命あり。即ち蠻野の習、一人罪せらるれば、禍三族に及ぶとあり、主人敵を獲て、血緣難を免れざるとあり、此時忠臣義臣の我子を殺して、主君の胤を存すると、古へ往々にして此事ありと見えたり。忠義の爲めとは云ひ乍

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ら、爰に至りては悲慘實に極れりといふべく、世に悲慘なるは義理と人情との衝突を以て最とすと雖も、恩義山よりも高き主君の故に、慈愛海よりも深き我子を殺すの、義と愛との衝突ばかり恐らく悲慘なるものはあらじ。彼淨瑠璃の作者は、看聽の客をして、悲哀の美觀を喜ばしめんが爲めに、義理人情の衝突を骨髓となして、其劇曲をものすると、巢林子以來比々皆然らざるはなく、而して亦其時代物の多分は、其衝突中の最も悲哀慘憺なる、主家の爲に我最愛而も往々にして夫婦が中の一粒種としいつくしめる子女を捧げて、我手にかけて其命を殞さしめ、先祖より受たる我家の血統素より重からざるに非ず、されど君家に代へ難きの故に、血涙を呑み、九腸を斷ちて、この忍事を敢てするの事を以て、人の袖を絞らしむるものあり。『菅原傳授手習鑑』は近松諸作以後の最上乘なるを以て稱せらる、而して其最も傑れたるは、即ち其寺子屋の段の、武部源藏夫婦の忠義と、松王夫婦の忠義との、圖らざるに相符合して、松王の悴小太郎が菅秀才の御命に代り奉るといふの條にあり。松王が「女房悦べ、悴は御役に立つたぞよ、……ム、、、出かしをりました、利口なやつ、立派なやつ、健氣な八つや九つで、親に代つて恩送り、お役に立つは孝行者、手柄者」と熱湯を飲むの念を顏に現はさじと、血涙を拭ふに至りでは、看客誰か、袖を絞らざらんや。『御所櫻堀川夜討』に、泣いた事のなき辨慶が、初めて會ひし我子信夫を手にかけて、主人卿の君の御身代りとなして四十餘年の溜涙を一時に灑ぎたる、『嫩軍記』の熊谷次郎が舊恩を思ふて、敦盛の身代りに我子の小次郎を打ちたるなど、此等は人口に膾炙するものにして、名優の一たび之を演ずるや、滿場欷歔咽嗚の聲ならざるはなきに至らしむ。もとより演劇の架空擬事なるを知ると雖も、看客は忠義の凝る所には如斯き悲慘の衝突もありなんと、其同感同情を露呈し、又之によりて教を受くると尠からず、而して看客多く此種の愁嘆劇を見んとを望む。之を望む所以は彼子を殺して忠義をなすを以て、大なる美德と信ぜるが故なり。昔時に在りては、武士の如きは忠義の極如此きに至るも、能く之に甘んずるを以て理想とし、事實としては、古支那春秋の世、趙の程嬰杵臼の二人が、君の遺孤を立てんと計りて、一人は其子を殺し、他は其身を殺したる類の美蹟を欽慕して感激措かざるあれば、亦之

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

に乘して、時代の理想を種として戯曲を編むの淨瑠璃作者等の、御身代りの悲曲を作りて、之を節奏に合せしめ、之を舞臺に演せしむるものありて、人々之を見、之を聞いて、更に亦其情を動かし、其理想を熾すものありしならん。たゞに武士のみならず、百姓町人に至るまでも、之に動かされて、如斯きを以て忠義の精髓と理想したりしなり。

蓋し我子を殺して忠義を成すが如きは、これ封建の世、干戈やむなきの時代には、往々にして其事蹟を生ぜしならん。蓋し如斯きは、其時代に在りて始めて有り得べきものにして、郡縣の世、文明の日は、此忠義を行ふべきの機會を生ずるとなく、また之を敢てするものなけん。されば之を以て野蠻の弊習といはんか。乾燥なる權利義務の論者には、君の馬前に打死するとも痴度に似たるべく、況して人の爲めに我子を殺すが如きは、親權を以て子權を侵害するものとなすべし、往年さる議論を唱へたるものもありき。されど蠻野未開の時代を評して、背理の事物のみ存せりとなすこと勿れ、忠孝節義は艱難に露るとかや、然らば、刀を枕にし、鼙響を聞いて蹶起せざるべからざるの時代の、國家人命日一日も安泰なるとなきに當りては、太平文化の日に於て冀望すべからざる底の忠孝節義の者を起すは自然なり。主人の爲めに我愛子を殞ふ如きは、子を愛するの至深の情を割いて、義の爲めに奉ず、忠義これより大なるはなし。假令其中背理無情ありと雖も、吾人は其美の爲めに此等を顧みるに暇なし、此等を擧げてことがましく論ずるものは、則ち犧牲獻身の美徳を背理無情を以て難ぜんとするものならん。昔はアブラハム、其獨子イサクを活ける神の祭壇に捧げて、之を焚殺せんとせしは、神に仕ふる篤信敬虔の熱熾なるが故として、千古信仰の美談たり。彼愛子の生命を以て、君家に奉ずるや、其精神、何ぞアブラハム、イサクを捧ぐるに殊ならんや。封建武士は、其主君を以てまた仕ふべきの神となして、其忠義は敬虔を含めり。若し彼等をしてアブラハムの地位に在らしめなば、能く其獨り子をも神の祭壇の火中に置き得るものなり。

吾人頃は多くの淨瑠璃を繙いて、我子を主人の子の御身代りとなす節の、彼にも此にも愁嘆場を成せるを見て、時に悲涙を催し、また思ふ處尠からず、竊に彼等の節義を、アブラハムの信仰に擬して、爰に此說を作す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

今様夫婦氣質（上）

紫琴女

◎素麵は潰しても潰しの利かぬ學者の奧様

山の手の何處やらに、是波霜太様とて、旦那は日々さるお役所の屬官勤め、お髭もまだ薄墨の、多くはあらぬ御俸給ながら、奧様もさる學校の女教師様、お二方の收入を、寄合世帶の御仲睦しく、どちらが御主人とも分らぬ御會釋ぶり。お座敷にはちやんとお二方の机並べて、男女合宿の書生交際、奧様役もかたみ代り。毎朝の御出勤にも、旦那様の洋杖奧様持ちて送り出玉へば、奧様がお穿きもの丶注意、旦那様より老婢に與へらる丶ほどの御心入。二三町は御一所に、向ふ横町でお別れの際には、兩方から丁寧にお辭儀なさる丶とて、男尊女卑の風習に慣れし人達の珍らしがり、時刻を計りて態々見物に行くほどの評判も、我に疚しき處なければこそ、お二方は濟したもの。兩方から様づけの御相談も奇麗に調ひ、日曜毎には上野淺草、手を携へて御散歩の都度、今日はあなたのお驕になされませ、次の日曜には私がと、一切議論はぬきにしての同權交際。是で一生が濟むものなれば、女の子を生んだとて、さう案じたものではない。孫にも何か職業をと、老婢も大きに發明したほどの仕義。去年の暮には、旦那様から、奧様へは吾妻コート、奧様からは旦那様へ、銀側時計のお贈り物。此暮は何がよからむと、春早々から、暮れゆく年の、人の苦勞も御存なきかの嬉しき御思案。眞理に合ひし御算段も、からりと外れし奧様の御懐姙。初夏の頃より酸きもの好みし玉ひて、十二月の末といふには、お二方へ平等のお贈りもの、天からも降らず、地よりも湧かねど、奧様のお腹より、おぎやあ〱と飛出せしお子寶。其お喜びにお歳暮のとりやりも立消えとなりし其代り、おしめの詮索、玩具の買入、御餘念もなき其内に、年も明けお枕直しも濟みて、奧様は從前の通り御出勤。赤様は乳母の手に、虫氣もなく育ち玉ふ嬉しさに、今日はあなたが早かつたの、明日は私が勝ち升るのと、御歸宅の遲速に、赤様の可愛さ加減、正比例でもするかのやうに、お土産までも競爭心、罪のないいさかひに日を暮し玉ふ程に、ゆく月も來る月も、會計は足らぬ勝、是迄には覺えなき、三十日の苦勞にお氣が注き、扨も不思議小さき人一人殖えたれば

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とて、此費物の相違はと、お二人とも／＼細かき算盤置き玉へば、成程奧樣の御出勤故に、身分不相應なる乳母といふ金喰ひ代物、是で確に五六圓宛の相違はあり、其上出產當時の費用、舊產婆では心許なしと、內務省免許の產婆のちやき／＼產科醫までも人選した上、習慣ではあれど古襤褸古綿などは、產褥熱を起すものと、是も消毒したガーゼ。萬事病院もどきのお手當の濟口は、毎月の收入で償ふてゆく筈なりし、夫や是やで此仕儀と。此處一番改革の必要に迫られて、旦那樣は其夜一夜、まんじりともし玉はず。考へ通したる上句の果が、ある可き事か勿躰なや、學者の奧樣を潰しものに、是からはお臺所働らき。お守り役も御自身に、乳母と老婢はお拂宮、人二人減すとして見ると、よし十何圓の奧樣のお月給夫れは皆目這入らぬとした處で、お身のまはりの張も要らず、御交際費も皆無となる、其上にも亦世帶の費用、主婦自分が立働らくと、下婢にさすとは二割の相違。夫や是やを差引けば、さうした方が遙か利方と。苦肉の一策いひ憎くさうに、打明けての御談合。奧樣とても此節の會計、持あぐみ玉ふ折からとて、いや／＼ながらもさう致し升る外はとの御內意に、首尾よう御相談纏まりて、速に學校を御辭職の、夫よりは形勢一變、お頭だけは束髮の、奧樣が何事ぞ、前垂掛の世話女房、赤樣をおんぶして、釜の下焚き付け玉ふ事もある。夫は覺悟の上ながら、慣れぬ手業の爨たきの失策。お學問とは關係なきを、萬々御承知の筈の旦那が、かうして見ればはつゆいさゝか、伎倆なき奧樣の、內兜見透し玉ひてや。お詞さへもいつしかに、どうせいかうせいの下女待遇。何如に養はれて居ればとて、そんな筈ではなかりしと、奧樣が今日此頃の不平の矢先。旦那樣より又橫柄なる御註文。度々異味の、御馳走には恐れるから、今日は肉も肴も要らない。あつさりとしただしで、冷素麵ならば造作もなからう。此間某の宅で振舞はれし、夫れは實に甘かりし。彼は實に幸福だ、細君が料理の上手故にと、あてこすりの譽め詞は、確に我を批難の心か。扨も憎し樣側で、鬚をひねる其手間で、なぜ此臺所の忙しさ、手傳ふては下されぬかと、奧樣のお腹立は亦一倍。なんでもない事冷素麵、夫れはかうするものであると、さつと一杓水かけて、すゝぎし上のゆで加減、何とでござんす耳人と、此頃の信用復於に、鼻もたか／＼さし付くる積なりし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に、青菜に鹽の夫ならぬ、生素麵に水の奇特。扨も不思議やめちや〳〵の物潰れ、打て一丸となす可も、引延されぬ時間の切迫。まだか〳〵とせつかるゝ、奥樣ははや絶躰絶命。此失策を披露しては、又々相場が下るであろと、思ひ付きの急腹痛わいた〳〵とうめかるゝに旦那樣も大吃驚。何處ぢやさすつて遣うかと、ひだるき御腹に力一ぱい、御部屋へ扶け入玉ひての御介抱振。まんざら御愛情の失せしでもなき御樣子に、奥樣もほつと安心の、其次にはお氣の毒、始めて素麵の仔細、かく〳〵と打明けての御懺悔、餘りの事に旦那樣もお腹は立たず。我も貴樣を、潰して遣ふ積りならず、矢張是も素麵仝樣、潰しの利ぬ代物だつたか。是では思案を代ねばならぬと、己が名の霜太ふるを、幾度も繰返し玉ひしとかや。

氷の話（其二）

（維新以後の製氷）

鴫村耕夫

◎我國今日、都門邑里到る處、夏季は氷に渇を醫し、涼を逆ふるを得て、夏日氷の需用、年々に増加し來り、東京府下にても一年の消耗高二千餘万噸に上れり。此盛なる蓋し維新以後にありて、而して如斯に氷需要の途を開きたるものは、實に本年一月に物故せられし中川嘉兵衛翁の力なりとす。翁は正に近世の闘鷄稻置大山主と稱すべし。

◎翁は維新前後より天年氷の伐出貯藏に心を用ゐ、或は富士山より、或は諏訪湖より、或は北海道より、氷を採りて、東京横濱に持ち來りたるとあり、後明治二年函館五稜郭の濠の天然製氷に適せるを發見して、米國より初めて伐氷器械を購入して、爰にはじめて、やゝ完全なる製氷田を得たり。これより、五稜郭氷の名ありて、其名は今日に至るまで重きをなせり。五稜郭は今は大阪の人山田某の伐氷地となりて、中川氏は五六年前故ありて別に五稜郭の近傍なる神田に新に完全なる氷田を築造したり。

◎今日もなほ往々氷室の看板の旗に函館龍紋氷と染め出して、其名に信用を得んとを欲するものあり。龍紋氷とは、彼即ち山田氏の五稜郭より伐氷せるものにして、其氷室を龍紋氷室と稱するによる。然るに龍紋の稱もとこれ中川氏より出づ。第一回内國勸業博覽會の東京に開設せらるゝや、中川嘉兵

衛翁伐氷器械に採ふるに五稜郭伐氷の圖を出品して、
龍紋賞牌を受領し…

常に之を嘆ぜられしとぞ。…

衞翁伐氷器械に添ふるに五稜郭伐氷の圖を出品して、龍紋賞牌を受領したり。それより同家賣出しの看板として、上に龍紋賞牌を描き、下に伐氷の景を圖したるものを用ゐたるより龍紋氷の名ありて、後五稜郭伐氷の山田氏に歸すると共に其名もまた彼に移れり。

◎嘉兵衞翁は伐氷の爲めに苦心を重ね、失敗また尠からず、嘗て富士山の氷を切りて、清水港より船にて東京に廻しに、いざ荷卸せんとて之を見れば、包みし菰のみ殘りて、氷は泮けて一片だに殘らざりしとぞ。此類の失敗度々なりしも、運搬の便開け、荷積方巧みなりし爲、今日にては、殆どさる失敗なしとぞ。氷を菰にて包みたるなど、溶泮を誘ふに過ずして、今は船積も藏入も裸の儘にして、却て溶解すると尠しと。

◎中川翁の氷を伐採したる當初の志望は、西洋人のなすが如くに夏日飲食物を貯藏して、其腐敗を防ぐの用に供せんとするにありて、氷をつめて、飲食物を容れ置くべき氷箱なるものをも製造したりしが、當時の日本人はいまだ之を用ゐるまでに開化せず、氷箱の發明も無効に歸し、而して主として飲料に供せられて、人躰を害することも多きは、翁は在世の日常に之を嘆ぜられしとぞ。翁もと博愛義侠の士、此嘆あるや宜なりといふべし。

◎西洋には、我國の如き氷水なるものなし。氷にて他物を凝らして飲食に供するなり。氷水といふ新規のもの丶出來せしなど、頗る翁の豫想の外なりけらし。

◎然れども衞生上よりいへば、氷の水に優る万々にして、元來泥水中に在りても、氷は汚物を殘して、透明に結するものにして、また人躰を害すべきバクテリアは七日間氷中にあれば必ず滅亡するものなれば、清水を撰びて結氷せしめたる氷の衞生に適するは云ふを俟たず。各地の製氷處にては、之に使用する水は、地方廳の撿査を受けて認可を受け、氷結の後もまた檢査を經て、かくて飲料に適すと認められたる上にて、また東京に輸入すれば、警視廳の檢査を受け、惡きものは、用捨なく發賣を禁止せられ、爲に多量の氷塊を河中に投入するは、毎年の事なり。然れども人口少き田舎地方の清水の既に府下水道の水に優ると万々なるが上に、之を氷結せしめたるものなれば、夏日の水道の水に優ると素より論を俟たざるなり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

◎今中川氏所有の神山製氷處の話をきくに、毎年一度氷田を掃除して清潔になし、冬に至りて清水を湛へたるもの、十二月中に結氷を始むるに、其時分地上は未だ雪十分に降り積らざれば、自然塵芥の氷面に飛散するを以て、其氷の五六寸に結びたるを悉く取棄てゝ再び結氷せしむる時分には、積雪既に滿地に在りて、塵芥の飛散するものなし。人夫等は、氷面に降り積る雪をば注意して拂ひ除き、また鉋を以て氷面を削りて清潔になし。雪の氷面に降り積もる時には、多少寒氣の透徹をさへぎりて、結氷に害あるを以て、之を除くものなり。而して拔氷器械といふは、筋立、鉋、鋸の三種にして、鋸の齒の荒きやうのものつきある筋立にて、氷面に線を引、其線を沿ふて、鐵製の長方形なる枠のみの臺に、刄を挿みたる鉋にて氷面をけづり、かくて結氷の厚さ八寸にも至れば、彼線に從つて、丁字形の西洋鋸にて切り取り、釘抜の形やうの氷ばさみにて氷片をはさみて引き上げるなり。

◎天然氷を切り採るには、多くの時日と、天氣の工合、溶泮の虞甚だ多きとが上に、これまで粗惡の氷を切しものありしが、今日にては、さる粗惡のものなけれども、其筋にては注意の爲時に折角藏入れせし多量の氷を取り棄てしむるとなどあるより、自然時日を要すると尠く隨て溶泮の患多からざる、且又清耳水を以てする器械氷の製造は、これより增加すべく、嘉兵衞翁の嗣佐兵衞氏等は發起して、新に蒸溜水を以て器械氷の製造に從事せんとせり。

◎天然氷を產する所、函館、新潟、神奈川、上州の榛名、赤城、攝津の六甲山、信州の諏訪湖、富士山の甲州側等あり。北越地方にては冬季多量の雪を穴の中に踏込みおきて、夏季の飲料に供す。

◎外國にては、夏季の宴會に凉風を得んが爲めに花卉草木を凍らし込みたる大氷塊を席上に置くとあり。我宮庭にても御座の傍に大盞上に大氷塊を置かせらるゝとありとぞ。

◎近年鄕地の製氷會社なる山東直砥氏は、中川翁の工夫されたる氷箱の如きものを賣り出さんとせしも、なほ其甲斐なかりしとぞ。日本橋には氷をつめたる冷藏をつくりて、當日賣れ殘りの魚類を預る所あり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

時文

◎露國形勢總覽　伊東祐穀編纂　東京統計協會出版

露國今日の形勢如何は、假令志經世に非ざるも、なほ之に通ぜんとを欲するものなり。伊東氏は爰に最近の統計によりて、同國政治經濟宗教教育法律、商工業等の現況を案じて、細大漏らさず之を編述して、此一袖珍書を編す。吾人は其功勞を多とするものなり。

◎片輪車　櫻痴作　春陽堂版

癩病の女乞食の片輪車に乘りたるが、鮫が橋にて自害したると、またさる大名の次男が、賤しき女俳優に契りて子を設け、其爲に世評にかゝりたるとの二談の天明及明和の舊記に見えたるを一つとなし、某家騷動の事蹟を基礎となして、朝倉家といふ大名のお家騷動につくりなしたるものなり。いつもながら其文にこれといひて感激を起し、情を惹く處もなければ、またこれといひて、齒にさはるやうな處もなきは、盖し櫻痴の筆法なればなり。

◎新小說第二年第八卷　春陽堂版

口繪のコロタイプは明治美術會の連中が、これより續々つくらんとする活人畵の一なり。寫眞版は同會展覽會に見えたる上作幷に參考品、目出度きものもあり。『通例人の一生』嵯峨の屋おむろが近業の大作と志しての小說なりとか。其通例人とは如何なるをか擧げたる、田村義明といへる豪家の子息が、生育の初めより可もなく不可もなき成蹟を以て、小學中學を終へ、それより土地の漢學先生の塾に學びて、やゝ平仄の置き方を覺えて、自作の詩を新聞などに投じたる處、新聞社員等におだてられて、いゝ氣になり、天晴詩人になり濟し、東京へ大詩人修業と出かけたる處、奇材の叔父にたしなめられて、商業に轉じ、これより藝者買をはじめ、金につまりて藝者に振られて故鄕にかへり、暫くにして諏訪宿の女郎に熱くなつて、金を蒔きたるが、これではと親族協議の上に、女房を取らした處が身が落付いて子供も出來、久し振りにて東京に遊山に來りて叔父に面會する段までを寫せるなり。義明は即ち嵯峨の家が、稱して通例人となせるものなり。吾人は作者が通例人に就いて、如何なる主義を有せるかは知られども、義明の如きは吾人之を目して、未だ通例人の中に置くを贊する能はず。而して彼作者は一生と云ふも、描き出したる處はわづかに半生のみ。結婚は小說を終らん、されど人生は結婚後が長きに非らずや。

◎新著月刊　四卷　東華堂版

『淸心庵』は泉鏡花の作、華族の年若奥様が、遊山の後より山に隱くれて、一人の孤兒と共に暮らすといふ筋、幽玄か朦朧か知られども、奇を衒ひていやみ多きは、此作者の弊、凝つては伸びずと知れ。

『紅筆』は長唄の師匠の娘が、藝者にもらはれて御酌になるといふ筋をば、寫實的に、藝者お酌の狀態心中を寫したるもの、可なりの出來。

『底無沼』は、山下雨花といふ初陣作家の作、村中評判の美人娘が、意氣地無の夫に嫁して出來し子の衣裳の見苦しきを苦にやみ、村長の子を羨やみて、其念つもりて病死したるが、夫はその悲しさに堪へず、子のまた底無沼にはまりて溺死したるより、遂に狂氣したりといふふし、初作としては讀むに足る。

『誰が罪』は宙外の作、父無し子の母親が人の妾となれるを遊び仲間に罵られてくやしく、一夜激しく母親と喧嘩をなして、自殺を計りて遂けず、然るに母親は井に投じて死したるを、其子の長じて軍人となりての懺悔物語なり。宙外の作としては、あまり宜しきを得たるものならじ。近來『誰が罪』といふ題を以ての小說二つ出でたり、其一は紫琴の『世界の日本』に載せたるものなり。此二者を比較すれば、吾人は先づ指を後者に屈するものなり。

作家苦心談此度は紅葉及び正太夫のなり、いつもながら讀むべきものなり。

未讀の分◎多情多恨◎松菊餘影

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎女界文壇雜俎

	七月上中期
◎詩經に見えたる周代女子（久保得二）	帝國文學第三十一號
◎女子と佛敎（靑山茂子）	傳燈第百四十五號
◎高等教育を受くる女子に望む	女鑑第百三十六號
◎財產に嫁するの弊	家庭新第四、五號
◎我が國の幼稚園（木場貞長）	同 第四號
◎房總半島の女子教育（岡嶺）	東海新聞六月三十日、七月一日
◎高梁順正女學校創立者福西しげ子	中國民報七月一日
◎幼兒の研究	京都府教育雜誌第六十三號
◎兒童の宗教心と宗教々育（松本孝二郎）	反省雜誌第十三年第六號
◎兒童の研究（下田次郎）	同
◎小兒研究（高島平三郎）	教育壇第六號
◎小兒心理學（續）元良勇次郎	女子の友第二號
◎兒童教育談（角谷源之助）	大日本婦人教育會雜誌第九十五號
◎女子服裝の改良に就きて（淺岡一）	女子の友第二號

片々

◎同志教育　は成瀨氏の女子大學に贊同すと雖も、なほ其學科程度の過低なること、設立地の大阪を撰びたると、附屬事業の過多なるとに就いて、いや反對の意向を示せり。

◎女子の友　記者は曰く女子大學の事、近時の一問題となり、女鑑は頻りにその早計を論じ、女學雜誌は頻りに辯護の勞を取る、女子大學にして難あらば將に言はんとす、女鑑の反對は、或は我が爲めに苦口の良藥たらん。女學雜誌の贊成は最負の引き倒しならずば可なりと。女子大學の難なるものあらば果して如斯くいふべきか。吾人は其然らざるを信ず、殊に女鑑論者の苦言いな中傷の言の如きは決して之を總させざるや必せり。

◎加藤弘之氏　去月十　日の事とかよ、女子高等師範學校に『女學生の心得』を演說す。西洋に於ける高等女子教育可否の兩說を擧げ來りて、我國にては女子の身体の發育を害せざるの極度に於て　職業其他の專門學を授くるの必要ありて、其種學校のいよ〳〵盛大を來たさんとを望むといひ、また女學生の姑と衝突することあるも、宜しく經驗實地の知識の學問は、母親若しくは姑に讓して、之より教を受けずんばあらず、これ一家平和を來すの道なりとす。

◎女子の腦髓　米國の學者某氏は、近頃の研究によりて、女子の腦髓は、男子の腦髓より更に緻密なるを發見して、女子の腦力は男子に劣るとの舊來の迷說を打破す。

◎婦人佛敎徒　吾輩は所謂婦人佛敎徒なるものをして彼基督敎徒の婦人と、對比せしめんか、吾が佛敎徒婦人の忸怩たるもの往々にして之れあり。彼れ基督教徒婦人の如何に自己が宗敎布敎に熱心なる、且其一擧一動の宗教的なる、然も彼等は慈愛、同情、熱心の紅涙を以て自から進んで信仰を旺んにし、宗敎を弘擴せんとするに熱心なる、之を我が佛敎徒婦人に比すれば、其行爲動作决して同日の論に非らざるなりと論ずるは明敎新誌。

◎小兒の研究　米國に於ける兒童研究の旺盛なると、我誌も屢々之を報じたるが如くにして、五月中シカゴにて世界未曾有の兒童研究大會議を開くとへありき。濠洲の如きもまた近時兒童展覽共進會を開きたりとなん。而して我邦にも此事近時おひ〳〵盛んになり、高島平三郎氏元良博士の如きは、其熱心者を以て聞ゆ。先づ其流行を證せんが爲めに、乞ふ女界文壇雜俎の項を見よ、七月上中期にして、如何に多くの兒童研究說が、多くの雜誌に現はれたるかを。

◎兒童の宗敎心　に就て松本學士は之を研究して、槪括的に四項の判斷を下して曰く、（一）兒童は槪して神は人なりとなす、（二）或兒童は神の感情的性質を認む、（三）或兒童は神の知的性質を認む、（四）或兒童は全く宗敎上の敎化に從へるものあり。と、而してまた兒童が宗敎心を得べき源泉は大凡（一）自然界よりして驚愕、崇高、崇嚴、神秘等の感情を得て宗敎的感情の基礎となし、（二）人間界及び社會よりして從順、尊敬、法則、權力、憐愍、同情、純潔等の槪念を得、これよりして、宗敎心の根據をなす、（三）想像力によりて絕對無上の境界を描出すといへり。其遺傳及び父母兄弟の宗教心を問ふとのなきは如何に。

◎女服改良案　として淺岡某、女子の友に其說をなすの要に曰く、余は今より女子服裝の改良の第一着手として名稱せしめ　且其上衣は、古來女官又は公卿太夫杯の家に女裝として用ゐられし、細長若くは之に幾分の改正を加へて着用せしめんとを希望すといひ　而して衞生上經濟上より、廣く大なる今日の女帶を廢せんとを望むといふ。

◎小西信八氏　盲啞教育研究の爲め歐米漫遊の節米國ジヤクソンビルの諸學校を巡覽しての報知に、當地女學校は勿論、或小學校にては、料理法を敎へなり、マカエン學校にては、聾者に之を敎ふるとま、眞に殊勝なり皆敎師の口尖を見て、數名の男女生徒が　菓子をこしらへ、スウプを製すなど、我女學校にてもこの法なくはへ〳〵とを望むといへり。

◎獨國の　ランゲ女史女子高等教育に關し、近時のフラウ新聞に寄書して曰く女子高等教育の問題に關し、反對論者は主として、醫科、博言學科の學者に在り、是れ經濟上の理由に出づるものにして、醫師及び男敎員は、女子の競爭に對し、畏怖を懷き女子に此等高等地位に進むの通路を與ふるを敢せざるなり。然れ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ども一般の學者社會に於ては、逐年女子高等教育を可さするの度を進め、雖路稍々開けたり、今後十年を出でなば女子の地位に非常の變遷を來すべしさ。

◎英語を用ふる人民　當世紀の初、全世界中英語を用ゐる人民の數は二千万人に過ぎざりしが、現今英、佛、獨、晉、伊、西衛の七ヶ國語を用ゐるもの計四億にして其中英語を用ゐるもの一億三千五百万人あり。當世紀の初に比して殆ど七倍の多きを致せるなり。

◎巴里婦人の復讐手段　慈善會場火災の當時男子は、婦女子等が哀れに救助を呼び求めたるを突き放し、已れ等のみ逃れて安全を得　猛火の中に多くの婦女子を犠牲にしたるは、昔より弱を助くる義侠を以て神髓さなし居たる巴里男兒の性根を失ひたる卑怯の振舞なりさ、諸方に攻擊の聲高かりしが、此頃巴里の婦女子等團結をなし、當時無情の行爲ありたる男子の姓名を目錄さなして、廣く之を配布し、其の目錄中の人物は今後斷然絕交して、交際場裏に入らしむべからずさの規約を立てたるが、右目錄中には以前は夜會に果報者を以て目されたる程の人氣紳士もあれど、今日にては彼等は見る蔭もなき有樣なりさいふ。

◎メキシコの　婦人は一般に夕景馬車を大衢に驅るを好み、而して其通路は一定せりさいふ。其時には馬車一哩の長さを連ぬるともありさいふ。

◎天𦾔あたり　の醜婦醜業の爲めに、先づ臺灣に續々群をなして入りしが爲めに彼地土人をして、日本婦人は皆如斯しさ思はしめたるは、遺憾なり。

◎新高山　臺灣の最高峯モリソンの山は、此度賢しきあたりの思召を以て新高山の名を下し賜はりたり。

◎同志社　明治二十九年度報告によれば、創立以來の卒業女生の數百八十九名、其中看病婦たるもの五十五名、家政に從事するもの七十八名ありさいふ。

時　報

◎三女學校の卒業式

●華族女學校卒業證書授與式　は本月十七日擧行せられたり重なる來賓は蜂須賀文部大臣、同夫人、田中宮内次官、都筑文部次官、黑川東宮太夫、佐々木常宮周宮御用掛、同夫人、林富美宮御用掛、淸閑伏見宮別當、近衛學習院長、東久世樞密院副議長、德川公爵、鍋島侯爵、同夫人、前田侯爵夫人、岩崎男爵夫人、高崎男爵夫人、花房帝室會計審査長並に生徒の父兄保證人等にして、午前九時一同式場に着席し、校長細川潤次郞氏全科卒業生渡邊しげ、勘解由小路富久、南部瑞芽、梅津ますみ、山口えい、松平英子、荒川豐次子に卒業證書を授與し、夫より中小學各級及常生徒總代に證書を授與し細川校長の式辭、全科卒業生總代勘解由小路富久子の謝辭ありて閉場し來賓には立食の饗應ありたり。

●神戸女學院　は去月二十九日其第十五回卒業式を執行したり。卒業生は高等科にて、片桐熊代、多辻壽賀、赤松小夏、普通科にて田中信、辻榮代、井上喜代、大熊蓮、木山年、裁縫專修科にて範多藤、辻梅、佐方淸、合計十一名なり。當日は卒業生總代の告別辭、村井知至氏の演說其他唱歌奏樂等の諸式ありき。

●希臘正教會女子神學校　にては　本月九日其第九回卒業式を執行し、卒業生の謝辭朗讀　主教ニコライ師の教訓、生徒の唱歌等あり。卒業生は、全科大和田エレナ、新妻エカテリナ、中村アグニア、高瀨ワエーラ、平館マドロナ、撰科生武市マリナ、井上ワエーラの七名なり。

◎神戸の婦人習藝學舍　とは同地南美以美教會員岡里子夫人を會長さして、有志の女生徒に裁縫刺繡等の工藝を教授するものにして、往々成績よろしきを見るさいふ

◎女子高等師範學校生徒補欠募集　女子高等師範學校にては一年生に缺員あるにつき、來る九月、該校に於て試驗の上十二人入學せしむさいふ。志願者は願書に履歷書を添へ、來る八月十五日限該校に申出つべしさ、志願者の承知すべき事項は規定の通り。

◎天城婦人會　備前國兒島郡藤戸村なる天城婦人會は、從來同地の同志のみを以て組織せるものなるが、更に全郡一般に對して其趣旨を發表し、廣く會員を募集せんものさ、同會の主任者たる藤森某は、先月來東西に奔走し居れるが、此度下津井及福田味野等の地方に於て新たに二十餘名の贊助加入を申込むものありけれは尙熱心に募集に盡力し、同會の事業を振張する筈なりさ云ふ。

◎女子學藝會　美作國津山町大字南新座の竹内文子氏は今度標題の如き會を組織したる由なるが其學科は英語、習字、讀書、裁縫等にして目下既に數十名の生徒ありさいふ。

◎長崎玉の浦女學校　長崎なる玉の浦女學校は來學期より同市新大工町長崎醫藥學豫備校の跡に移轉する筈、其上にては二百五十名許の生徒を授業するに差支なく寄宿舍も五十名許りを容るゝに足るさ云ふ。

◎孝婦賞を受く

宮崎縣日向國宮崎郡住吉村

外山岩次妻　郡司　カチ

資性溫順舅及夫に事て孝貞明治二十五年舅の中風に罹るや專心看護日夜怠らす自ら薄うして舅に厚うし夏凉冬暖甘旨之れ進む偶二十七八年の役に當り夫の外征に從ふや自ら家計を理め孝養益々篤く承歡慰藉至らさるなき等婦道を守る玆に九年操行一日の如し洵に奇特さす依て其賞さして木杯一個下賜す

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治三十年六月三十日

宮崎縣知事正四位勳三等　千　田　貞　曉

◎ドクトル中村安子　豫て北米合衆國賓府のペンシルベニヤ大學に留學し專ら醫科學を修業中なりし本邦婦人中村安子は、去る四月一日遂に三年の學期を卒へドクトルの學位を得たり。聞くが如くんば、同女は自今シカゴ府に於て開業の目論見なりとか。

◎女子の潜水業　新潟縣佐渡國相川の平民眞島理平は長女この(二十三)次子たま(二十)三女さく(十七)四女まき(十五)といふ四人の娘を持ち、孰れも幼少より海底を潜りて魚介を獲ふ事に熟し、水中に在ること廿七八分間の永きを保つを以て、今回此の四人を連れて出京し、横須賀近海にて執行したる水雷練習の爲めに海底に遺棄せられたる水雷外管を拾採せんとを海軍省へ出願し、追ては他の潜水業をも營むべき胸算なりといふ。

◎亡父の墓を尋ねて樺太島に渡るの女子、東京神田に在り、女髪結にして、遺產二千六百圓を殘したるもの加賀金澤に在り。前者は名を井本ふさ(三十八)といひ烟草店を營めるもの、後者は名を靑山はる(三十)といふ。其内縁の夫は人力車夫なり。

◎二皇女殿下の挿秧御覽　皇女常宮、周宮兩殿下には、去月二十日午後一時頃、高輪の御殿を出御ありて、荏原郡大井村貴族院議員兒島惟謙氏の邸に渡らせられて、此處彼處の野良に賤の男賤の女等が早苗植うる有樣を御覽じ玉ひて、午後四時過る頃、御還啓ありき。猶御還啓の際、兒島氏に仰せありて、稻二束稔御持歸り遊ばされしとなん承る。

◎愛媛縣教育協會　其四月に於ける第十回總集會に於て、縣立高等女學校設立の件幷に尋常師範學校女子部再興の件を知事に建白するとを可決したりといふ。

◎百二十歳の老婆　八丈島に住す、此人もとは加奈太の黑奴にして、今更強健にして、三四十歳の孫多しといふ。

◎海外女界

◎侯爵ソマルセット夫人　英國婦人基督教禁酒會は、此程の會頭改撰の際、またまたソマルセット夫人を重撰せり、夫人の重撰せらるゝと此度にて八回目なりとぞ。

◎英國ケンブリッヂ大學　の大多數の決議を以て女子に學位を授與するを否決せしや、爰に於てヒーアプオールトの監督は、婦人の爲めに新にクイン、ヴイクトリア大學を新設せんとを建議したり。

◎十五貫三百六十目の女兒　濠洲メルボーンにて此程兒童養成の良法を研究せんが爲めに、孩兒博覽會を開たる節、參考品として出席したる七歳の女兒、其重量は標題に記する通。

◎布哇の舊女王カイウラニ　舊女王リゝチ、カラニの姪女なり。夙に聰明の聞えあり、芳紀十四英國に遊學し、後擧げられて王嗣となりしが、其後三年にして、革命の變に遭遇し、爲めに廢せられて庶人となり、今や英國に寧なうして配所の月を見る。

◎佛國ロヴエル夫人　は動物の心理研究に從事し「ダーウヰン」の著書を佛譯し、又狼の心力及動物の算數と題する著書を公にせしが、頃七十の誕辰に達したるを以て、佛國學術社會の人々は夫人を招待して祝宴を開きたりといふ。

◎紐克大學　は此程レイノルド夫人より四十五弗の寄附金を受けたりといふ。

◎紐克府の女教員は俸給增額の件に關し、學務會の賛助を得んとを請願す。現今同府内小學校の校長は二百五十六人、教員は四千人にして、内凡四千人は薄給の女教員なりといふ。

◎英國女皇　在位六十年の紀念の爲めに、倫敦府に新に一の大學起らんとす。

◎同じく　紀念の爲めカナダの婦人社會は紀念の爲めにあつめたる金額は病貧者扶助の用に供すべしとの女皇陛下の思旨を奉じて、一の看護婦學校を新設せんとして、先つ頃モントリールに會したる全國婦人大會にては、寄附金募集着手に從事するとに決し、募集したる金額は上院議員ドラモンド、コックスの二氏、幷にサンフオルド、フレーミーング氏の三人の監督に附托することゝなれり。

◎米國ユタ州會　上院議員なるカナン夫人は、女子書記の健康保護の建議案を呈して、該州の上下議會を通過したるが爲め、多數の婦人より感謝狀を受けたり。

◎夫に代りて說教す　米國マッサチユセット州ウイリアムスブルグ市なる一英以教會派の教師、頃は俄に病んで某の日曜日の說教を欠ぐ、其妻これに代りて見事なる說教をなし濟したりとなん。其人名をウエイアント夫人といふ。

◎英國今代の大史家　ジヨン、リチヤード、グリーンの未亡人は、自らまた史家の列に耻ぢざるの英物なるが、夫人今や擧られて倫敦圖書館の唯一女子委員として、カノン、エインジヤー。アオースチン、ドブソン。ダブルユー、エス、リリー。サア、ソレデリツク、ポロツク、フレデリツク、ハリソン。ダブルユー、ユツチ、レツキー。教授リヴイス、カメル其他の文學者の聞え高き男子に伍して、万綠叢中紅一點の觀をなす、

◎詩人ヒーマンス　の爲め紀念碑を英國リヴアプールに建設せんとして、義捐金募集に從事するものあり。

◎英國テツク侯爵夫人　は年々政府より受くる金額の五分の一即ち五千弗以上を宗教及慈善事業の爲めに寄附すといふ。

◎シカゴ府マツコツク學校　の教頭メリー、ダアロー、オルソン夫人は、本年度の卒業生にして、最も佳好なる衣服たゞし其價二弗を超過せざるものを纏ひたるものに賞與金を與へたり。

明治女學校圖書館

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治女學校圖書寄贈廣告

第七回

一親鸞眞傳◉和歌梯◉貴女修身事蹟◉默示錄註釋◉約翰傳註解各一部　著者　村田勤殿

一巢林子戯曲◉近松著作一斑◉近松門左衛門　著者　塚越芳太郎殿

一碣石閒幽蘭◉明治詩話　著者　籾山逸也殿

一衛生綱鑑　著者　兒島高里殿

一新撰萬國地理◉同日本地理◉同地文學◉同小地文學　著者　山上萬二郎殿

一英文典詳解◉奈良親王◉扱都大王　著者　酒卷貞一郎殿

一日本政綱論　著者　海江田信義殿

一家計簿記學◉帝國物産地誌通覽◉工業進化論　著者　坪谷善四郎殿

一細菌學雜誌自第二號至十三號◉傳染病研究所一覽二部◉ペスト病の原因調査第一報告◉傳染病研究所設立仕末◉實布垤里亞及虎列刺病治療成績報告◉恙虫病調査報告各一部　著者　北里柴三郎殿

一無機化學　著者　金田義一郎殿

一英文民間治療全書　故著者　令孃ハーツホルン殿

一ロングフェロー氏詩集◉ミルトン氏詩集◉英文エグルス、イー、ジョーンス氏傳　津田梅子殿

一昆蟲世界　著者　名和靖殿

一應用植物篇◉マコーレー論文集◉英文典◉英文守錢奴の娘　千住貞子殿

一詩董狐◉中等國文讀本　出版者　三樹一平殿

一開國始末(三部)　著者　島田三郎殿

一和譯ミルトン氏自由之埋　江上勝子殿

社告

布川静淵小此木秀野合著
俳諧史傳
正價金二十七錢　郵稅金四錢

櫻井成明譯
希臘孝子 **腓立比物語**
正價金二十八錢　郵稅金六錢

故若松賤子英文集
巖本嘉志子
正價金六十錢　郵稅金四錢

巖本善治著
吾黨の女子教育
正價金十錢　郵稅金二錢

女學雜誌一手大賣捌　東京神田區表神保町　東京堂

明治廿七年二月十四日内務省許可
明治三十年七月二十四日印刷
明治三十年七月二十五日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話本局十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY